

年報

津山 弥生の里

第6号（平成9年度）

1999

津山弥生の里文化財センター

序

埋蔵文化財行政に携わり四半世紀が過ぎる。就職当時は、列島改造ブームとやらで日本各所が掘り起こされ、そのため遺跡の事前発掘調査が頻発し、その調査要員としてちらほら自治体に職員が採用され始めた頃だった。

その後、文化庁や奈良の国立文化財研究所、都道府県の教育委員会文化財保護部局などのご努力により、発掘調査に携わる職員の数は急増し、それにつれ今日では工事に伴う発掘調査件数も膨大なものとなっている。

よきにつけ悪しきにつけ、今振り返ると当時が埋蔵文化財保護行政の大きな転換点であったように思う。

四半世紀が過ぎた今、掘りおこされた考古情報は膨大な量に達し、その間みがかれた調査・分析技術や遺跡・遺物の整備・保存技術などは、ひと昔前には想像もつかなかったレベルに達し、また埋蔵文化財専用の施設も充実してきた。

しかし、バブル崩壊以降の深刻な不況の持続は、その流れにさまざまな方面から水をさしているようにもみえる。

たとえば、某都道府県の文化財保護費が対前年度比3割カットされたとか、公立の埋蔵文化財センターが廃止され財団に統合されるとかの話を、日常的に耳にするようになった。

ともあれ、戦後最悪の不況の中で今問われているのは社会全体の構造改革であり、その点からいえば、この困難な時代も、より新しい文化財保護行政のありかたを模索する好機であるにちがいない。

いちもくさんに走り続けてきた埋蔵文化財行政は、当然のごとく画一的な対応をどこでも生んだ。そのことは行政である以上必要な事でもあるが、おちついて考えてみれば、その地域ちいき自治体じちたいに異なった存在基盤もあるはずだ。今はその存立基盤を深く見据え、個性的な保護行政を確立することがとても大切なことのように思う。

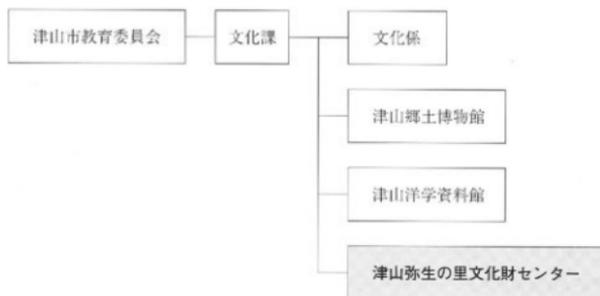
当施設も開館8年目を向かえた。今後、より地域に根差した活動ができるように希冀する。

平成11年3月31日

津山弥生の里文化財センター
所長 中山 俊 紀



津山弥生の里文化財センター機構図



津山弥生の里文化財センター職員配置 (H11. 3. 31現在)

所 長	中山 俊紀 (H10. 4. 1～)
主 査	安川 豊史
ク	行田 裕美
主 事	小郷 利幸
ク	平岡 正宏
事務員	川村 雪絵 (H10. 4. 1～)
嘱託員	野上 恭子
ク	岩本えり子
ク	江見 祥生
ク	家元 弘子
ク	神田 久遠 (H10. 4. 1～)
臨 時	丸王 佳苗 (H 9. 12. 1～H10. 7. 31)
ク	山本 有希 (H10. 4. 1～H10. 11. 30)
ク	上原 香里 (H10. 8. 1～H11. 3. 31)
ク	三谷 順子 (H10. 12. 1～)

目 次

1. 津山弥生の里文化財センター事業概要	1
(1) 展示事業	1
a. 入館者数	1
b. 民俗資料の整理	2
c. 民俗資料紹介	3
d. 民俗資料の復元	4
e. 啓発・普及活動	11
f. 寄贈資料	11
(2) 文化財センター日誌抄	12
(3) 埋蔵文化財発掘調査	16
平成9年度届出関係一覧	16
(4) その他の事業	18
(5) 調査の概要	19
a. 京免遺跡発掘調査報告	20
b. 美作国府跡発掘調査概要	30
c. 津山高校創立百周年記念館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報	37
d. 津山市街地再開発事業に伴う発掘調査	55
2. 資料紹介・研究ノート	61
(1) 津山の弥生土器3(臺台形土器)	62
(2) 吉見林遺法面採集の土器	66
(3) 弥生時代後期の注口土器について	75
(4) 津山市横山出土の須恵器	85
(5) 津山城今昔③～通称“大津”～	89
3. 講演録	
「美作国の成立」	(1)

例 言

1. 本書は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターが平成9年度に実施した事業概要などについてまとめたものである。
1. 平成9年度の埋蔵文化財発掘調査は、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、出土遺物の整理は上記の他、川村雪絵、野上恭子、岩本えり子、家元弘子が、民俗資料の整理は江見祥生が主として担当した。本書の執筆は各担当者がおこない、編集は小郷、川村がおこなった。
1. 自然科学的分析として、岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏に「吉見林遺法面採集土器の胎土分析」、「津山市横山出土の須恵器の胎土分析」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。
1. 講演録「美作国の成立」は、平成10年2月21日に行われた第16回津山市文化財調査報告会の狩野久先生の講演記録を文章化したものである。

1. 津山弥生の里文化財センター事業概要

(1) 展示事業

◆入館者数

当センターが開館してから、今年は8年目を迎え、入館者数は平成9年度末現在で延べ46,603人に達しました。9年度は、入館者全般に渡って減少の傾向にありました。

昨年度の入館者数は下表のとおりです。

平成9年度総利用者数内訳

区分/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間合計
一般	253	406	186	84	232	152	193	172	49	24	66	114	1,931
高・大	17	6	1	40	12	2	2	0	5	19	0	12	116
小・中	103	621	79	93	173	14	211	11	4	25	37	474	1,845
老人	1	3	0	3	7	6	2	13	11	0	0	8	54
合計	374	1,036	266	220	424	174	408	196	69	68	103	608	3,946

利用団体数及び人数

団体数	2	11	3	2	2	2	6	1	0	0	1	4	計
人数	93	746	93	111	82	73	316	30	0	0	30	439	2,013

団体の内訳

月	日	団体名	人数
4	16	兵庫県上月町社会福祉協議会	50
	22	大崎小学校 6年	43
5	1	院止小学校	43
	2	久米町中止小学校	32
	2	鶴山小学校	98
	2	東小学校	88
	2	弥生小学校	98
	9	宮小学校	89
	11	大阪府エルビーガス協会三島支部	28
	13	勝北町立新野小学校 6年	35
	17	北小学校	78
17	大阪府エルビーガス協会三島支部	36	
6	28	香川県国分寺町明生大学	121
	8	新見市唐松小委員会	30
	15	岡山ボーイスカウト	33
7	15	愛媛県新居浜市南中学校 P T A	30
	8	津山工業高等専門学校	41
8	22	清心小学校	70
	5	親子バス	34
	21	清泉小学校 生徒父兄	48
9	28	盛崎町内会	35
	30	神戸北高等学校校友会	38
10	9	佐良山小学校 3年	69
	19	藤部婦人会	44
	21	南小学校 6年	60
	22	高知県南国史談会	42
	23	加茂小学校	71
	31	岡山市津島福徳納税組合	30
	11	27	総社市西公民館
2	22	古井町教育委員会	30
	3	東小学校 2年	80
3	6	鶴山小学校	121
	12	東小学校 3年	168
	12	東津山愛育委員	70

◆民俗資料の整理

今年度は次のような活動を行いました。

- ①「衣類」のコーナーに斜めに板を張り、帽子、鞄、手甲等を展示しました。
- ②「住居」のコーナーに斜めに板を張り、また階段様の棚を作って、枕や、行灯、等を展示、取藏しました。
- ③取藏中の大八車の部品を組み合わせて復元、2階の玄関脇風除室に展示しました。

(この品はNHKの「あぐり」ロケに貸し出されました)

今年も民俗資料及び展示に関する貴重な御意見を各方面からたくさんいただきました。有り難うございました。

(江見祥生)



「衣類」のコーナー



「住居」のコーナー



大八車展示風景

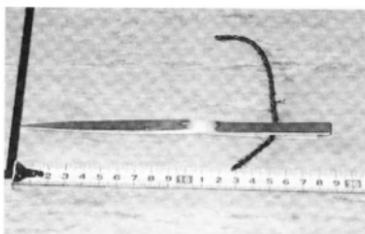
◆民俗資料紹介

今回は薫細工等に使われる竹針とドンゴロス用の針について紹介します。

灰ふごの底を編んだり俵の口を編むときには、小綱を通す針が必要です。そこで、身近な竹を材料にして針を作りました。また、近年では米袋のドンゴロスの袋の口を縫う針を転用しました。

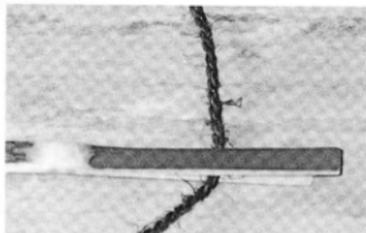
竹針は表皮と肉の間を薄く割って、小綱が抜めるように作っており、節を割れ止めに利用してあります。

(江見祥生)

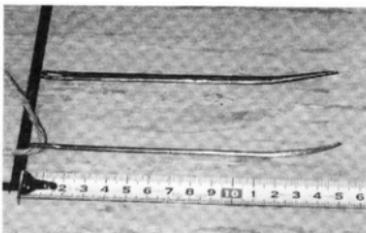


(イ)竹針

(ロ)頭部拡大

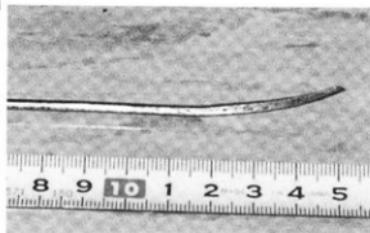


ドンゴロス用針は針孔に麻紐を通し、巻き込んである袋の口を縫いやすくする為に先端が約10° 上向きに曲がっているのが特徴です。



(イ)ドンゴロス用針

(ロ)先端部拡大



◆民俗資料の復元

近年、農業は、能率アップによる効率化が急ピッチで進むにつれて、旧来の伝統文化や民俗文化が次第に失われてきました。「稲」の品種も改良されて、今日では薬細工がしにくい品種が多くなってきました。

ここ津山の周辺農村でも薬を使った日常用品は、急速なくなってきました。

当センターには薬製品の収集品がかなりありますが、これらが古くなり、傷んできたときのことを考え、かねてから薬細工の作成過程を記録して後世に残したいと思っていましたところ、幸い、以前から薬細工を伝えたいと願っていた人がおられ、快く協力して下さることになりました。この方は子供のころから薬細工が好きで、その道のプロに薬持参で習いに通ったという津山市絞部の梶岡貞知氏です。同じく絞部の梶岡辰男氏も協力してくれました。

薬を使って品物を作るとき注意するのは、「作る人が使う人でもある。すなわち長さや幅は製作者各人の体つき寸法によって作る。」ということです。したがって文中の寸法はその単位を重視して見てください。

H10年2月9日製作技術、製作過程記録の為に「薬モッコ」の製作を行う。

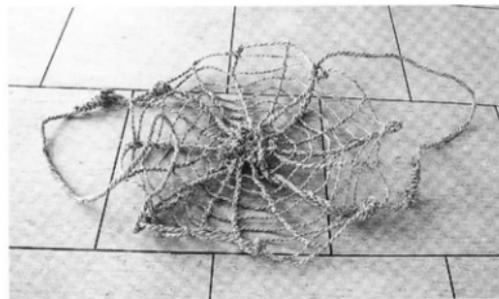
モッコの骨組は梶岡貞知氏製作。本体製作者は梶岡辰男氏。



梶岡貞知氏



梶岡辰男氏



縄モッコ完成写真

①餅藁を用意し、繊維をなめらかにする為軽く木槌で打つ。繊維がバラバラにならないよう力まかせに打たないこと。

②準備として親縄（3本編み）、小縄（2本編み）を編む。親縄は市販のものを用意し、小縄はシュロ縄でもよい。

③4本の親縄を組み、骨組みを作る。親縄の長さは片側各一ヒロ半にする。（作り手が両手を一杯に延ばした長さが一ヒロ。）

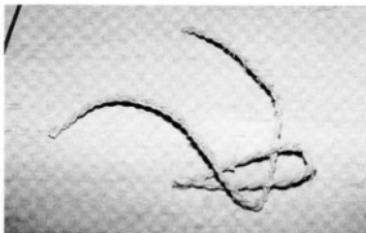
このとき「へそ」という中心部を「手車に編む」。これは、右手で左手首を掴み、その右手首を別の左手で掴み、というように丁度井桁の様にする編み方で、この編み方では縄がしっかり締まって丈夫になり、「へそ」にかかる重さは四方に同じように分散される。

（手車に編む一実例を小縄で示す）

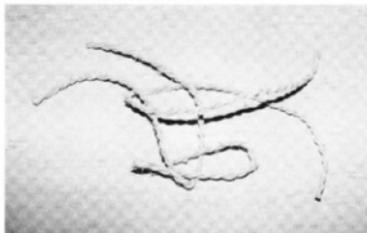
（イ）縄を二つ折にする。



（ロ）別の縄をかぶせる。



（ハ）3本目を（ロ）にかぶせる。



（ニ）井桁を完成させ、各縄端を四方にしっかりひく。



（ホ）骨組みの完成。



④次に小繩を「へそ」脇に結び、反時計廻りに蜘蛛の巣状に繩を張っていく。(横枠を作る)このとき、まず同方向の2本の親繩を2～3回(作り手の指3本幅)位よじっては小繩を挟んでまた2～3回よじり小繩を留めていく。これだけでもう小繩が絞むことはない。

(小繩の挟み方の作業風景)

(イ)



(ロ)

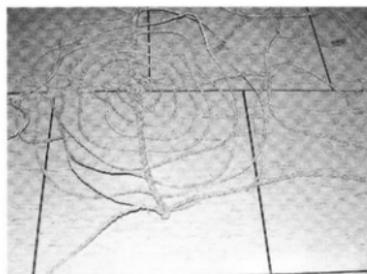


(ハ)



⑤モッコ本体の横枠が8～9本目になったら、小繩の端を親繩に結び、編んできた親繩2本を結ぶ。他の親繩も同様にする。

(下図)



⑥⑤の後、1組2本の親縄の片方を隣の別組の親縄の近い方の片方と結び付け、そこから「へそ」に向けて横枠の小縄を④の要領で挟みながら編んでいく。

これを4回繰り返して、縦の枠を8本にする。

(下図)



⑦「へそ」付近との結び方は「男結び」にする。

(下図はその手順を示す)

(イ)



(ロ)



(ハ)



⑧⑦の間にさらに小縄で縦の枠を作り「へそ」と結ぶ。最終的には縦の枠は16本になる。

(下図)

(イ)



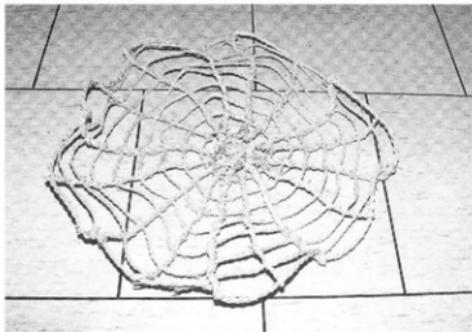
(ロ)



(ハ)



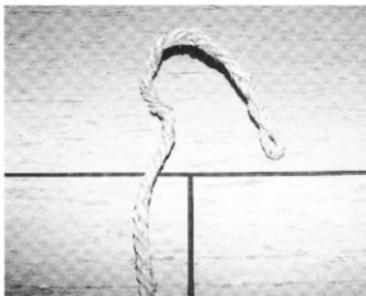
⑨体裁を整え、余分は切る。



⑩親縄で持ち手を付ける。長さは立って腰までの長さの2倍にする。(2本網にするという)

(イ)親縄に「耳」を作る。

(ロ)最外側の縦横の枠の結び目を包むように枠に「耳」を残して(イ)を結び付ける。



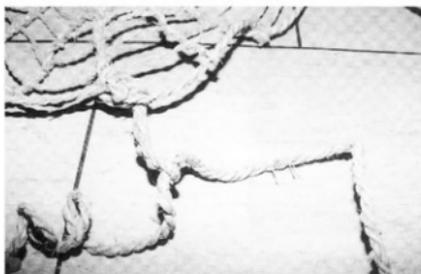
(ハ)縦枠に沿って(外→内→外)の順に横枠の間にか
らめ、「へそ」で90°に曲げ、縦枠に沿わせる。(図は
裏面から)

(ニ)細く最外枠に結び付ける。

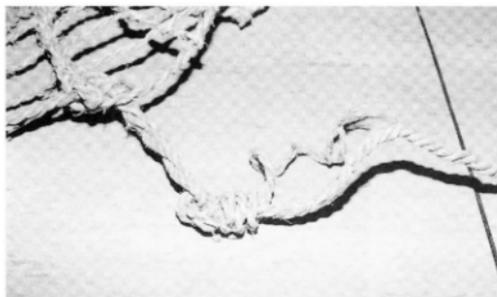


⑪親縄を「耳」に通す。

(下図)



⑫ 縄端を堅く親縄に巻き付ける。



⑬ 親縄の縄目を広げて、縄端を親縄に通し固定する。



⑭⑮～⑰を繰り返す。⑮の(ハ)は、今度は「へそ」のところで前の持ち手の縄とクロスさせる。
(下図-裏面から)



⑱⑲の(ニ)をきつくする等全体を整える。(完成)

(江見祥生)

◆啓発・普及活動

【刊行物】

- 『年報 津山弥生の里第5号』
- 『有本遺跡他』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集
- 『日上畝山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集

【講演会・研究会】

★第16回 津山市文化財調査報告会

平成10年2月21日(土) 場所 津山市総合福祉会館 参加者140名

第1部 調査報告

- | | | |
|----------------------|---------------|------|
| 「田邑丸山古墳群の調査」 | 津山弥生の甲文化財センター | 小郷利幸 |
| 「日上天王山古墳・日上畝山古墳群の調査」 | 津山弥生の甲文化財センター | 安川豊史 |
| 「二つの院止～館跡と構城跡～」 | 津山郷土博物館 | 渡 哲夫 |

第2部 講演

- | | | |
|----------|-----------|--------|
| 「美作国の成立」 | 岡山大学文学部教授 | 狩野 久先生 |
|----------|-----------|--------|

★美作考古学談話会(会員24名)

- 第1回 5/10(土) 「日上天王山古墳」－発掘調査報告書から－(中山俊紀)
- 第2回 7/6(土) 「日上畝山古墳群発掘調査見学」(安川豊史)
- 第3回 9/6(土) 「出土遺物の保存処理について」(小郷利幸)
- 第4回 11/1(土) 「サルとヒト」－人類出現と考古学－(安川豊史)
- 第5回 1/10(土) 「文字資料と考古資料」(行田裕美)
- 第6回 3/7(土) 「津山城跡発掘調査現場見学」(平岡正宏)

★発掘調査速報展

「津山の歴史を掘る」平成7年度速報展

平成9年4月1日～平成10年3月31日

【西吉田北遺跡】(津山市西吉田)

縄文土器、弥生土器、石器(石斧・石錘・砥石)、分銅形土製品、土師器

【有本古墳群】(津山市下田邑)

土師器、鉄器(剣・刀子・斧・鎌)、玉類(ガラス製勾玉・ヒスイ製勾玉・碧玉製管玉・ガラス製小玉)

【十六夜山遺跡】(津山市椿高下)

陶磁器、瓦

◆寄贈資料

【民俗資料】

梶岡辰男	手鉤、手甲、屋根屋録、蚊帳
一宮公民館	押し餅、泥犬神、鎖鎌分銅、燗台、強盗、行燈、手鏡、れいてんぐ、鏡子、練炭製造機、剃刀
稲垣裕史	蓑枕
江見祥生	手動バリカン、初期電気カミソリ機、吸入機
田村幸夫	ランプ

【考古資料】

國米 博 明	弥生土器、土師質土器
木名 良 一	陶棺片、須恵器杯身片

(2) 文化財センター日誌抄〔平成9年度〕

- 4月8日 田越丸山古墳群墳丘測量実施（～9日）
- 4月17日 美和山古墳群の竹除伐作業
- 4月18日 滋賀県立安土城考古博物館へ展示資料貸出。
- 4月28日 河本清委員に津山城跡整備計画の指導を受けるため中山次長、行田主査、平岡主事が會敷作陽大学に出張。
- 5月1日 田邑の木材センター建設予定地の確認調査を実施。遺構・遺物は発見されなかった。
民間宅地造成に伴う総社国府跡の確認調査を実施（～2日）。
- 5月6日 高野の勅使遺跡確認調査を実施。遺構・遺物なし。
- 5月8日 保存計画協会木下氏を講師に、津山城跡整備事業内部検討会を実施。
- 5月9日 日上畷山古墳群第3次確認調査に着手（～8月29日）。
河本清委員に津山城跡整備計画の指導を受けるため永礼課長、中山次長、行田主査、平岡主事が會敷作陽大学に出張。
- 5月12日 狩野久委員に津山城跡整備計画の指導を受けるため山本次長、永礼課長、中山次長、行田主査、平岡主事が岡山大学に出張。
- 5月13日 保存計画協会川上氏を講師に、津山城跡整備事業内部検討会を実施。
- 5月19日 第3回津山城跡保存整備委員会を開催（津山市役所）。
- 5月29日 旧一宮公民館に収蔵されていた民俗資料を調査。
津山城築城400年記念事業検討委員会開催。
山陽新聞清水玲子記者取材中立ち寄る。
- 6月2日 広城堀蔵文化財発掘調査組織研究会出席のため永礼課長、中山次長岡山市役所に出張。
吉見の林道法面で弥生土器を発見。行田主査、平岡主事でも対応（詳細本書別項）。
- 6月5日 公立堀蔵文化財センター連絡協議会出席のため中山次長神奈川県に出張（～6日）。
- 6月16日 滋賀県立安土城考古博物館展示貸出資料返却。
- 6月17日 津山郷土博物館へ特別展のための展示資料搬出（製鉄関係資料）。
- 6月19日 駅南地区区画整理事業予定地の確認調査を実施。遺構・遺物なし。
- 7月7日 文化財保護委員会開催。河本清委員あわせて畷山古墳群の確認調査現地指導。
- 7月12日 津山城跡整備委員会委員狩野久氏・鈴木充氏整備指導（雇用労働センター）。
- 7月16日 古代出雲展見学（～18日）。
- 7月22日 シルバー人材センターにより沼遺跡の草刈着手（～30日）。
- 7月25日 文化庁記念物課岸本直文調査官による日上畷山古墳群現地指導。
- 8月1日 美術国分寺跡指定問題の現状と課題について中尾嘉伸市長及び井口正一助役に報告。
- 8月2日 日上畷山古墳群の確認調査現地見学会開催。
- 8月6日 津山やよいライオンズクラブの早朝例会で沼遺跡の草刈奉仕を受ける。

仙台市、金森氏・我妻氏津山城視察の案内。

- 8月20日 企画調整会議で、美作国分寺跡の指定問題に関する現状と課題について協議。
- 8月29日 日上畝山古墳群の確認調査終了。
- 9月1日 河辺のアパート建設予定地立会（～2日）。遺構・遺物なし。
- 9月2日 鈴木充委員に津山城跡の整備指導を受けるため内田特命参事、中山次長が米子高専に出張。
- 9月3日 沼遺跡の松が松喰被害を受けたため、除伐・焼却処分を実施。
- 9月4日 丹後山の携帯電話基地局建設予定地の確認調査を実施（～5日）。
第22回全国遺跡環境整備会議出席のため生涯学習政策審議室山下主幹、行田主査、安上町に出張（～5日）。
- 9月10日 美和山古墳群南法面の草刈実施。
- 9月11日 岡山県教育委員会文化課へ日上畝山古墳群の確認調査状況報告のため安川主査出張。
- 9月19日 日上畝山古墳群の保存協議のため、岡山県教育委員会文化課に中山次長、安川主査出張。
- 9月22日 高野の個人住宅建設予定地立会。
- 9月25日 津山城跡整備計画案協議のため内田特命参事、行田主査、新潟造形人学（牛川喜幸委員長）及び文化庁記念物課に出張（～26日）。
- 10月1日 中核工業団地古墳公園の草刈状況確認。
- 10月3日 津山市定期監査。
- 10月6日 美和山古墳群で強風のため倒壊した木を除伐。
- 10月16日 津山城跡保存整備委員会幹事会開催。
- 10月20日 久米南町誕生寺へ民俗資料の調査に向向く。
- 10月21日 日上畝山古墳群の保存協議のため岡山県教育委員会文化課へ中山次長、安川主査出張。
保存計画協会矢野氏と、津山城跡整備事業内部検討会を実施。
- 10月22日 神戸の個人住宅建築予定地立会。文化財センターの樹木の剪定。
- 10月23日 岡山県立博物館に特別展出陳のための資料貸出。
- 10月25日 福祉会館で中・四国前方後円墳研究会第3回研究会開催。
- 10月27日 美作地区文化財指導者講習会参加のため小郷主事、平岡主事が奥津町に出張。
日上畝山古墳群の保存協議のため岡山県教育委員会文化課に中山次長出張。
- 10月28日 日上の構造改善事業に伴う事前調査計画確認のため現地協議を実施。
- 10月29日 日上畝山古墳群の確認調査の状況報告のため安川主査が文化庁記念物課に出張（～30日）。
- 10月30日 苦田ダム建設に伴う奥津町での岡山県の調査現場を職員交替で見学。
- 11月4日 53号線バイパス建設に伴う墓地移転予定地（二宮遺跡）の現地踏査を実施。
津山城跡保存整備委員会幹事会開催。
- 11月6日 大澤正己氏、岡山県教育委員会文化課課長補佐柳瀬昭彦氏来所。
保存計画協会矢野氏と、津山城跡整備内部検討会を実施。
- 11月7日 岡山大学生資料調査のため来所。
- 11月10日 岡山市のまきび会館で、第4回津山城跡保存整備委員会を開催。
- 11月13日 中原の個人住宅建築予定地立会（中原遺跡）。
- 11月14日 二宮のアパート建築予定地立会（正善庵遺跡）。

- 沼遺跡の復元住居修繕のための資材搬入。
- 11月18日 中学校社会科教員研修会を文化財センターで実施。行田主査講師で参加。
- 11月19日 広島県世羅町の文化財保護委員会が文化財センター視察のため来所。
- 11月28日 衆楽園の池の護岸工事について現状変更の協議を実施。
大阪大学大学院生資料調査のため来所。
- 12月1日 文化財保護委員会開催。
- 12月4日 大阪府守口市教育委員会視察のため来所。
国分寺の防火用木工事の立会。遺構・遺物なし。
- 12月5日 中原の市道拡幅工事予定地の現地確認。
- 12月8日 国庫補助事業計画書提出のため、行田主査が岡山県庁に向向く。
- 12月16日 津山城跡整備に伴う確認調査に着手（～3月24日）。
- 12月17日 岡山県立博物館特別展見学（～19日）。
- 12月18日 広島県教育委員会文化課植田千住穂氏他資料調査のため来所。
- 12月19日 衆楽園の確認調査を実施。
- 12月24日 日上畝山古墳群保存協議のため永礼課長、中山次長が文化庁記念物課に出張。
- 1月8日 岡山県立博物館特別展貸出資料返却。
- 1月9日 小田中の白石哲氏から陶棺片発見との連絡を受け、受け取りに向向く。現地確認の結果二次堆積土中の発見で、現住宅下に古墳が存在した可能性も考えられたが調査不能でひきあげる。
- 1月12日 東一宮の館遺跡で個人住宅計画地について施主と現地協議。
- 1月13日 文化庁記念物課本中真調査官津山城跡確認現地指導（～14日）。
- 1月20日 総社の個人住宅建築現場立会。
岡山理科大学助手白石純氏資料調査のため来所。
- 1月22日 中尾嘉伸市長、井口正一助役他津山城跡確認調査現地視察。のち整備方針の確認協議。
- 1月24日 鈴木充委員津山城跡確認調査現地指導。
- 1月26日 日上の直原純氏から畑で大石発見の連絡があり現地へ。古墳の石室天井石の可能性もあるが正体不明。そのまま埋め戻す由。
- 1月27日 美作女子大学生一行見学のため来所。
- 1月28日 近藤義郎先生、河本清委員津山城跡確認調査現地指導。
- 1月29日 日上畝山古墳群の保存協議のため中山次長岡山県教育委員会文化課に出張。
東一宮館遺跡の個人住宅予定地確認調査実施。弥生時代とみられる溝、柱穴など発見（～30日）。
- 2月4日 中山神社の防災工事の立会に着手（～2月28日）。
- 2月9日 二宮遺跡確認調査着手（～19日）。
テレビ瀬戸内特別番組取材のため来所。
- 2月12日 山北の個人住宅予定地立会（高橋谷遺跡）。
リードオルガン協会佐藤泰平氏資料調査のため来所。
- 2月13日 岡山県埋蔵文化財担当者研修参加のため安川、行田主査、小郷、平岡主事古代吉備文化財

センターに出張。

梶岡辰男氏、梶岡貞知氏文化財センターでわらじ編みの製作実演。

- 2月16日 津山城整備推進議員団（市議）津山城跡確認調査見学。
- 2月18日 狩野久委員津山城跡確認調査現地指導。
- 2月20日 保存計画協会矢野氏、津山城整備計画打ち合わせのため来所。
- 2月26日 中山神社の防災工事に伴い文化庁記念物課下関久美子調査官が現地指導。中山次長、玉置主事立ち会い。
- 2月27日 衆楽園護岸工事現地確認。
- 3月8日 第4回加悦町文化財シンポジウム参加のため小郷主事加悦町に出張。
- 3月9日 美和山1号墳の芝張についてシルバー人材センターと現地協議。
- 3月4日 テレビ瀬戸内「ふるさとの源流」取材のため来所。
- 3月7日 美作考古学談話会津山城跡確認調査現地見学。
- 3月10日 平成9年度分布調査着手（～26日）。
- 3月12日 美和山1号墳張芝着手（～14日）。
- 3月14日 津山城跡確認調査現地見学会開催。
- 3月16日 第5回津山城跡保存整備委員会開催（文化センター）。
- 3月23日 奈文研主催の研究集会「遺跡の建造物復元方法の研究」参加のため玉置主事、平岡主事奈良市に出張（～24日）。



(3) 埋蔵文化財発掘調査

平成9年度福山関係 覽

第57条の3第1項

遺跡名	所在地	工事種別	期間	通知者	津山市発着	発掘日	指示事項	照文書番号	実施日	備考
美作国府跡	総社75-4他	下水道工事	9.7～	津山市長	津教委文第22号	5/20	立ち会い	教文理第233号	9/21～	

第57条の2第1項

遺跡名	所在地	工事種別	期間	福山著者	津山市発着	発掘日	指示事項	照文書番号	実施日	備考
美作国府跡	山北字平徳3-1他	宅風呂改修	未定	住吉木材	津教委文第14号	4/21	発掘調査	照文書番号	5/1～5/2	
天神原遺跡	天神原370-1	アパート建設	9.7～11	国内美	津教委文第23号	5/20	立ち会い	教文相第252号	9/1～9/2	遺構・遺物なし
飯布	高野本郷289-3	竈地外障工事	9.10～11	光井美典	津教委文第33号	7/28	立ち会い	教文理第588号	10/1	遺構・遺物なし
津山城跡	山下98-2	ホテル増築工事	9.12～10.9	津国際ホテル	津教委文第56号	8/12	確認調査	教文理第633号	未着手	遺構・遺物なし
備前城跡	山北3-15.3-29	住宅建設	9.10～10.4	山崎訓美	津教委文第58号	8/13	立ち会い	教文理第658号	8/19	遺構・遺物なし
歌春地	高野本郷293-5-3他	住宅建設	9.10～11	藤木茂徳	津教委文第59号	8/20	立ち会い	教文理第687号	10/22	遺構・遺物なし
歌原遺跡	二宮字千木81.263	駐車場建設	9.10～12	福本善夫	津教委文第61号	8/25	立ち会い	教文理第689号	10/30	遺構・遺物なし
美作国府跡	山北3-16.3-28	住宅建設	9.10～10.4	波辺アメリ	津教委文第75号	10/21	立ち会い	教文理第866号	10/4	遺構・遺物なし
中原遺跡	中原字三反畑366-2他	住宅建設	9.10～10.5	吉房英夫	津教委文第78号	10/21	立ち会い	教文理第866号	10/4	遺構・遺物なし
正新島府跡	東一宮688-168-2	住宅建設	9.10～10.2	小林不動齋	津教委文第85号	11/7	立ち会い	教文相第972号	11/14	遺構・遺物なし
美作国府跡	山北3-9他	住宅建設	9.10～10.2	住吉木材	津教委文第94号	11/12	立ち会い	教文理第1033号	11/10	遺構・遺物なし
美作国府跡	山北3-19.3-22	住宅建設	9.10～10.2	住吉木材	津教委文第101号	11/5	立ち会い	教文理第1066号	11/10	遺構・遺物なし
美作国府跡	藤社字中小路418-5	住宅建設	10.1～4	山形謙	津教委文第112号	12/26	立ち会い	教文理第1217号	1/20	遺構・遺物なし
津山城跡	山北69-21他	住宅建設	10.2～5	井上昇	津教委文第111号	3/11	立ち会い	教文理第1218号	1/17	遺構・遺物なし
歌春地	近長662-4.653-5	住宅建設	10.6～	中屋善志	津教委文第108号	12/22	立ち会い	教文理第1501号	10/6	遺構・遺物なし
高橋谷遺跡	山北字高橋上50-6	倉庫等造成	10.1	竹久秋夫	津教委文第108号	12/22	立ち会い	教文理第1555号	2/12	遺構・遺物なし

第57条の6第1項

遺跡名	遺跡の種類	通知者	通知日	照会費	備考
見11.31番地	弥生・古墳	津山市教育委員会	9.6.18	津教委文第41号	津道工務断面で発見。報告済み。

第98条の2

遺跡名	所在地	遺跡種別	調査期間	通知者	津山市発着	調査担当	備考
美作国府跡	山北字平徳3-1他	古墳跡	5/1～5/2	津山市教育長	津教委文第15号	9.4.24	安川豊史
日土畠山古墳群	日T-422-1,422-5	古墳	5/9～8/29	津山市教育長	津教委文第20号	9.5.12	安川豊史

◎現地説明会

日上敷山古墳群（6・14号墳）

平成9年8月2日（土）約70名

津山城跡

平成10年3月14日（土）約80名



日上敷山古墳群



津山城跡

(4) その他の事業

★埋蔵文化財分布調査（6年次）

平成10年3月10日～26日

津山市東田辺、西田辺、上田邑、下田邑、二宮地区

★遺跡の保存・管理

沼遺跡草刈

美和山古墳群草刈・剪定

井口車塚古墳草刈

正仙塚古墳草刈

中核工業団地内古墳（一貫東1号墳）公園草刈

★津山やよいライオンズクラブ奉仕作業

沼遺跡の草刈

沼遺跡住居・高床式倉庫の屋根の修復



高床式倉庫の修理状況



高床式倉庫完成



津山やよいライオンズへの感謝状授与式

(5) 調査の概要



京免遺跡発掘調査報告

1. 遺跡の位置 (第1図)

京免遺跡は、津山市街地の北方約2kmに位置し、吉井川の支流である宮川の左岸段丘上に存在する弥生時代中期から後期を中心とする集落遺跡であり、1977～1979年に行われた発掘調査では多くの竪穴住居、建物、溝、土坑などが検出されている(註1、第2図)。周囲には同時期の弥生集落が散在しており、東方500mには沼遺跡、沼E遺跡、1kmには野介代遺跡、2.5kmには押入西遺跡がある。また、北方約200mには兼保井遺跡、400mには大田十二社遺跡などがある。

2. 調査に至る経過

本調査は津山市沼7-7、7-8における事務所建設に伴うものである。この地は周知の遺跡である京免遺跡に該当する部分であることから、平成7年11月6日付けで、末澤安治氏より文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。これを受け、津山市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく発掘調査通知を提出し、原因者の費用負担で事前に発掘調査を実施することとした。

3. 調査の経過

調査は平成7年11月29日から平成7年12月5日まで実施した。東西方向に25m×8mの調査区を設定し、地下遺構に影響しない部分を残し、建物の基礎部分及び浄化槽設置予定部分について発掘調査を行った。調査面積は約100㎡である。調査の結果、複数のピットや弥生時代の溝などが検出された。発掘調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター主事坂本心平が担当し、執筆は事務員川村雪絵が行った。発掘作業にあたっては、津山市シルバー人材センターにお世話になり、下記の方々のご協力を得た。芳名を記して感謝し



第1図 位置図(S=1:25000)

ます。

橋本溝、三好昭二、横部明、脇山静馬、脇山康

4. 調査の概要 (第3図)

今回検出した遺構は、溝8 (SD1~8)、土坑1 (SK1)、その他複数の柱穴などがある。以下各遺構について説明を加える。

溝

8つ検出された。その中でも規模が大きく、唯一遺物の出土した溝がSD1である。SD1は調査区中央部西寄り検出された。南北方向にのびる幅1.5m、深さ0.2~0.25mの溝であり、多くの弥生土器が出土している。その他の溝は幅0.2~0.5m、深さ0.05~0.2mの規模をはかるもので、いずれも遺物は出土していない。

土坑

長径1.4m、短径0.5mの長方形に近い楕円形を呈し、深さ約0.06mをはかる土坑である。遺物は出土していない。

柱穴

合計22個検出され、その中で楕円状に並ぶ3つの柱穴がある (P1~P3)。出土遺物はなく、時期を特定することはできないが、前回の調査により西隣りで検出した建物跡 (京免遺跡6区、SB19) と方向がきわめて類似することから、SB19の時期である弥生時代中期後葉から後期前葉のものであると推測できる。

また、柱根の一部を残すものも検出された (P4)。柱穴の掘り方は直径約0.35mで、検出面から底面までの深さは約0.35~0.4mである。遺存していた柱根は、直径10cm、長さ25cmをはかり、材質はナラ類である (註2)。遺物は出土しなかった。

5. 出土遺物 (第4~第6図)

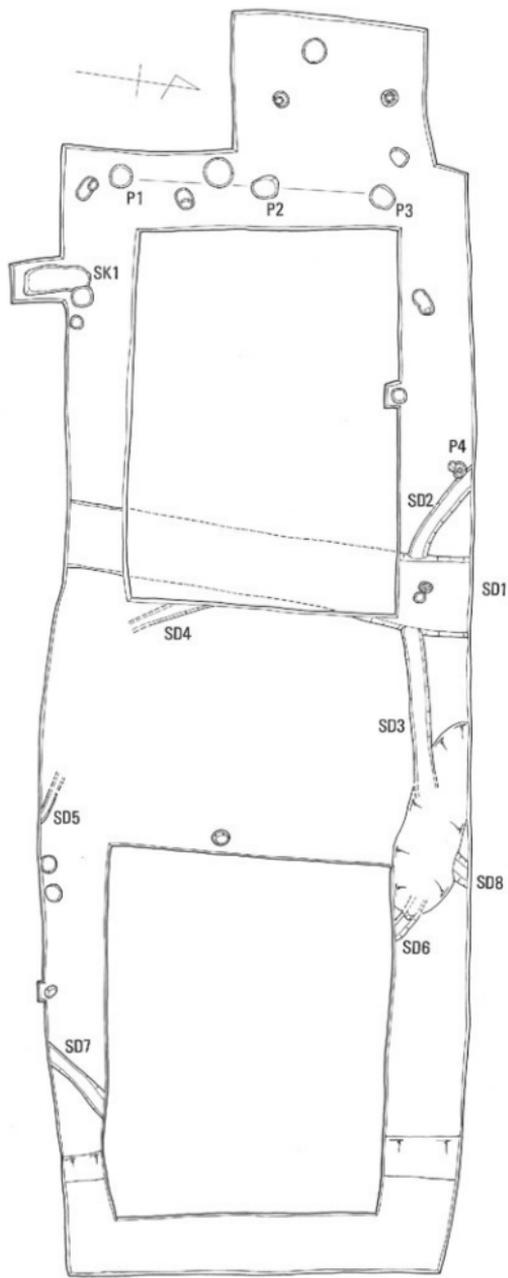
今回の調査で出土した遺物は弥生土器、石庭丁であり、すべてSD1からの出土である。以下その内容を述べる。

弥生土器

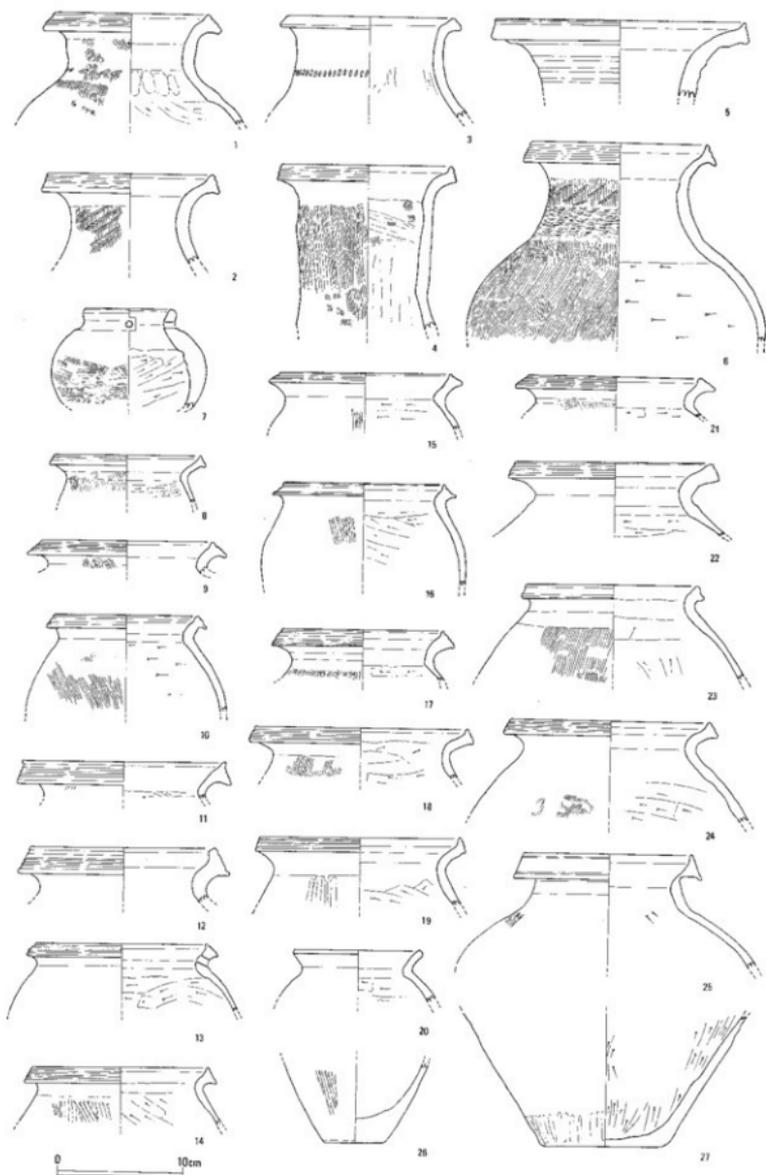
1~7は壺形土器である。1は筒状の頸部から外反する口縁部をもつ。端部は上下に拡張し、端面には3条の凹線文を施す。頸部から胴部にかけての外反はハケ調整で、上位をナア消している。頸部には刺突文を施す。内面は胴部以下をヘラ削りしており、頸部下半には指頭瓦痕がのこる。2は頸部からやや強く外反し、頸部にはハケ原体による斜め方向の刻み目文を施す。3は口縁部にかけての外反度は低く、端部は肥厚しないものである。頸部には刺突文をめぐらす。4は長頸壺である。筒状の頸部から短く外反する口縁部をもち、端部は上方に拡張している。口縁端面には3条の凹線文をめぐらす。外面は胴部以下でタテハケ、内面はハケ調整後、ナア仕上げをしている。5は頸部から口縁部にかけて大きく



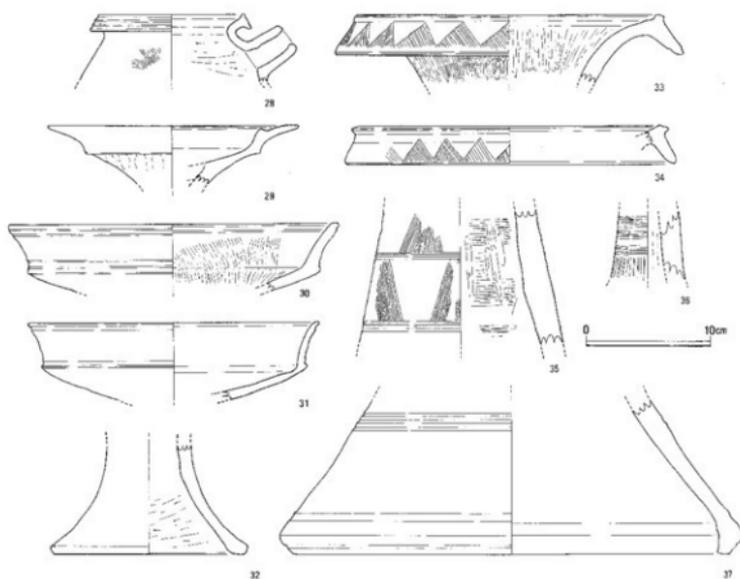
第2図 京免遺跡トレンチ位置図 (S=1:5000)



第3図 京免遺跡平面図 (S=1:100)



第4图 京免遺跡SD1出土弥生土器(1)(S=1:4)



第5図 京免遺跡SD1出土弥生土器(2)(S=1:4)

外反し、端部は厚彫しない。頸部には浅い3条の沈線をめぐらす。6は2同様、頸部からやや強く外反する口縁部を有し、端部は上下に拡張している。端面には3条の凹線文をめぐらす。頸部上位はハケによるタテ方向の刻み目文、その下には細かい横方向のハケ、胴部にはタテハケを施す。内面は胴部のみヘラ削りを施す。7は小形の壺で、胴部外面にヨコハケ、内面はヘラ削り調整である。頸部に1孔の穿孔がある。2孔以上あるのかは、破片のみの出土であるので明らかではない。

8~27は甕形土器である。8~25は口縁部、26・27は底部のみである。口縁部は口径が10.0~11.5cm前後のもの、13.0~14.5cmのもの、15.5~17.0cmのものに大別できる。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。口縁部は①上ドに拡張するもの(8~18、21、22、24、25)、②上方のみ拡張するもの(19)、③下方のみ拡張するもの(23)、④拡張を意識せず丸くおさめるもの(20)の4タイプに分けられる。拡張した端部には2~4条の凹線文をめぐらすのがほとんどであるが、中には23や25のようにナデ仕上げのみのももある。風化が著しく、調整が観察できないものを除けば、胴部の外面はタテハケ調整であり、19のようにタテ方向のヘラミガキを施すものもある。内面のヘラ削りは多くは頸部のくびれ部直下からのものであるが、19や24などはくびれ部よりもやや下方から施されている。13は頸部に1孔の穿孔がみられる。26、27は甕形土器あるいは甕形土器の底部である。26は外面、内面ともに風化が著しく、調整は不明瞭だが、わずかにタテハケが残る。27は外面底部付近にヘラミガキ、内面にはタテ方向のヘラ削りがみられる。

28は注口土器である。甕形土器同様、頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部を上下に拡張するものである。端面には3条の凹線文を施している。これについては後に詳述する。

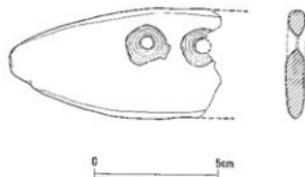
29～31は高杯の杯部である。これらは形態により、極端に口縁端部を拡張し、端部上面に凹線文を施すもの(29)、上方へやや湾曲しながらたちあがり、口縁端部は拡張せずに丸くおさめるもの(30、31)の2タイプに分けられる。29は杯部の外面上端部に指頭圧痕が残り、内面には9条の浅い凹線をめぐらす。30は口縁端部付近と杯部の屈曲部付近に2条ずつ、31は1条ずつの凹線をそれぞれめぐらしている。32、36は高杯脚部である。32は概に向かってゆるやかに広がる形状をなす。裾部は内傾しており、端部は平らな面をなしている。調整は内面のヘラ削りが顕著にみとめられる。36は外面に7条の櫛歯文を3段に、裾部付近はタテ方向の櫛歯文を施している。

33～35、37は器台形土器である。33、34はともに口縁端部であり、上下に拡張した口縁端部に鋸歯文を施すものである。33の外面にはタテハケ、内面にはタテ方向のヘラミガキが施されている。35、37は器台の脚部片である。35は現存部分で上段に2条、下段に3条の凹線文をめぐらし、それぞれの上に互い違いに櫛歯文を施している。内面はハケで調整後、タテ方向にヘラ削りを行っている。37は裾部上方に3条の浅い凹線文がみられ、下方に強いナデ調整がなされている。端部は内傾している。風化が著しく、細かい調整は観察不可能である。

これらの土器はおおむね弥生時代後期前半のものと考えられる。

石倉丁

緑色片岩の磨製石倉丁である。外湾刃半月形のもので、最大長8.6cm、最大幅4.5cm、最大厚0.7cmをはかる。紐孔は2カ所にみられ、表裏両面から穿孔している。



6. まとめ

弥生土器の年代について

SD1出土の多数の弥生土器は、一括資料として有効である。これらの土器について、他の遺跡からの出土土器や土器編年と照らし合わせ、考察する。

壺形土器は口縁端部に凹線文がみられ、胴部内面のヘラ削りは頸部直下から施されている。また、長頸壺の口縁部が頸部から強く屈曲するのではなく、曲線を描いて開く形であることも特徴である。

甕形土器は口縁端部の凹線文が明瞭なものと粗雑なものが混在している。ナデだけのものは少量。内面のヘラ削りはほとんどが頸部直下からである。

注口土器の口縁部形態は壺形土器とほぼ同じである。津山市内からの出土は初めてであり、岡山県下でも珍しい。把手付きのものであるが、島根県江津市波来浜遺跡B3号器出土土器に類例が認められる(註3)。注口土器については別稿で詳述する。

高杯形土器は口縁端部を極端に拡張するものと単に丸くおさめるだけのものが併存している。脚部は緩やかに広がる形状をなし、裾部に屈曲をもたない。前者は岡山県山陽町門前池遺跡住居13出土例に類似しているが(註4)、凹線文を施した口縁端面が水平である点で京免遺跡出土例と若干異なる。後者の例は多く、津山市内では小原遺跡(註5)他同時期の遺跡で多数出土している。

器台形土器は口縁部及び脚部に鋸歯文を多用している。口縁部は丁寧につくられており、一貫東遺跡(註6)などに類例がみられる(註7)。

全体的に見ると、弥生時代後期を前業、中業、後業の3つに分けると、前業の終わりから中業にかけてのものといえる。津山の弥生後期の土器編年については各遺跡ごとに編年がなされており、これらを参照できる。前回調査時の報告によれば、京免遺跡出土の後期の土器は同じ津山市街北部に位置する大田十二社遺跡の5区分を援用し、おおむね大田十二社2式併行期のものとされていた(註8)。今回の一括資料は大田十二社編年では1式から2式にかけてのものであるが、壺形土器や甕形土器の口縁部の特徴から1式とするには新しく、2式とするにはやや古い様相を呈していると思われる。よって、1式と2式との間にあらたな1型式を設定することも考慮しなければならない。

また、加茂川以西の小原遺跡、西吉田遺跡の出土資料からも、後期前半の土器編年がなされている。これらの土器編年に照らし合わせると、小原I式のように中期的な様相を残すものはみられず、II式のように各器種の口縁端面に退化傾向がみられないことから、これらの中間期に位置づけられよう。

また、今回出土した土器は岡山県南部(特に備前)に多く類似がみられる。土器編年でいえば、高橋編年Ⅶ-d期(註9)や正岡編年Ⅴ-1～2様式(註10)の範疇に含まれよう。

石廴丁について

出土した石廴丁は緑色片岩製のものである。前回調査時の報告によれば、前回の調査で出土した13点の石廴丁について粘板岩製のもの(A類)と、片岩系の石材を素材とするもの(B類)とに分類されており、未製品についてA類のものはなく、B類のみであることから、前者は製品による搬入品、後者は在地系のものであるとしている。今回出土したものはB類にあたり、在地の石材を使用して製作したものであろう。同様の石廴丁は本遺跡の他に大田十二社遺跡、高橋谷遺跡(註11)、紫保井遺跡(註12)からも出土している。

今回の調査は発掘面積が狭く、SD1を除けば無遺物の遺構が点在するのみであったが、SD1の一括資料は今後の美作における弥生土器の編年作業の大きな助けになるものと思われる。今後の資料数の増加が期待される。

(川村雪絵)

(註1) 中山俊紀1982『京免・竹ノト遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集) 津山市教育委員会

(註2) 粘板の材質については岡山県立津山高等技術専門学校工務 武川精治氏に御教示いただいた。

記して感謝の意を表します。

(註3) 東森市良・前島己基・松本岩雄1977『弥生式土器』『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ』

(註4) 岡山県教育委員会1975『門前池遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書9』

(註5) 木村祐子他1991『小原遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集) 津山市教育委員会

(註6) 斎藤夫1992『一貫東遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集) 津山市教育委員会

(註7) 一貫東遺跡報告書では、この土器を甕形土器でなく高杯形土器の杯部として報告しているが、ここでは口縁部のみ出土であるため甕形土器としておく。

(註8) 中山俊紀1981『大田十二社遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集) 津山市教育委員会

(註9) 高橋謙1980『弥生土器—山陽1~4』『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181号

(註10) 正岡睦夫・松本岩雄他1992『備前地域』『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』

(註11) 津山市教育委員会が1975～1976年に発掘調査を実施。報告書未刊。

(註12) 中山俊紀1993『津山市紫保井遺跡と中期小住居群』『古代古備』第15集 報告書は未刊。



1



2



3

1. 調査全景(西から) 2. SD1(東から) 3. P4柱根依存状況



1



2



3



6



4



7



12



24



22



26



27

出土遺物(1) (番号は実測図の番号に対応)



28



28'



32



35



36



33



34



出土遺物(2)

美作国府跡(総社33番地-1)発掘調査概要

1. はじめに

美作国府跡は、津山市総社から山北にかけて所在する。岡山県教育委員会および津山市教育委員会は、これまでに中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査を始めとし、周辺部の試掘調査を含めれば20以上にわたる発掘調査を実施してきた。

なかでも本教育委員会は、中心部の範囲と構造の解明を目的とした確認調査を昭和61年度から平成4年度まで実施した。当初は、幅3mを基本とするトレンチ調査としたが、官衙施設が次々と確認されるのに伴い、面積は限られるものの面的な発掘方法をとった。この調査の結果、東西88m以上150m以下、南北100mないし120mの政庁推定域が確認でき、その成果については報告書を刊行した(註1)。

その後も、周辺地区の開発に対する発掘調査を行ってきたが、今回報告するのもそうした調査のひとつである。調査地点は、津山市総社33番地-1である(第1図)。

2. 調査の目的と経過

今回の調査の原因となったのはアパート建設で、水田を埋め立てて造成した後に木造アパートを新築するというものである。建物の基礎部分は遺構面に達しないが、先の確認調査によって本地点が国府中心部の重要な一面をなし、予定地内には未調査箇所が広く残されていることなどから、事業主および岡山県教育委員会とも保存協議を行った結果、事前に予定地内の発掘調査を実施することとなった。本調査の実施にあたっては、事業主の小林正夫氏から協力をいただいた。

開発予定地の1,335㎡を調査対象面積として、平成9年1月30日に調査に着手し、同年3月13日に終了した。発掘調査の方法は排土処理の都合から対象地を二分して行った。水田耕土の除去はバックホーを使用した。調査面積は1,050㎡。

発掘調査には津山市教育委員会文化課主査安川豊史があたり、遺構実測には岩本えり子、家元弘子、橋本玲恵、浅岡美恵の援助を受けた。遺物整理作業は、以上に加え野上恭子、丸王佳苗、広政美智子、八幡住奈絵が行った。発掘作業には以下の方々に参加した。

社団法人津山市シルバー人材センター 梶尾喜明、加藤文平、杉本達美、谷口末男、藤沢淳一郎、大郷貴美子、河本久子、竹内里子

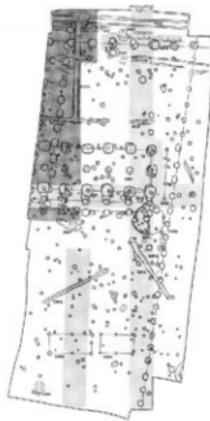
3. 調査の記録

(1) 従来の知見

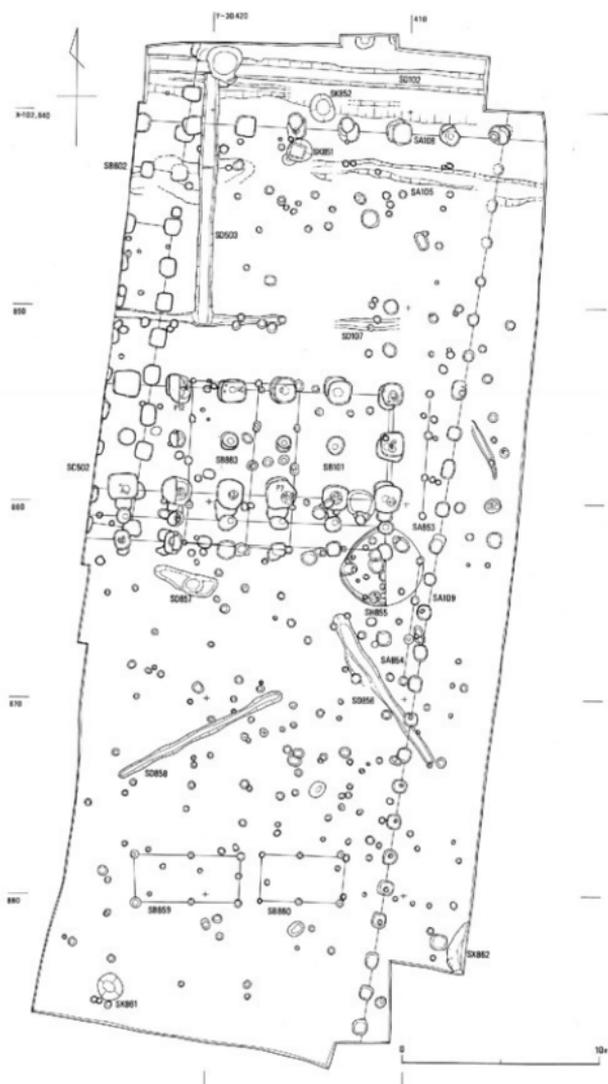
本地点は、過去に昭和61年度、62年度、平成2年度の3次にわたり部分的な調査が行われている。61年度にはT1からT5まで、62年度にはT8(以上、第2図網版薄色部)、2年度にはT28を調査した(同図網版濃色部)。その結果、大別して二期にわたる国府関連遺構



第1図 位置図(1:25000)



第2図 調査区域図



第3図 全体図(1:250)

と、それ以前、以降の二時期、合計四時期にわたる遺構の存在が確認できた。美作国府1期には、用地のやや東よりの部分で検出したSA109、西端部で検出したSB602・SC502がある。SA109は南北

塙、SB602とSC502は南北棟建物と同廊状遺構である。これらは、7世紀後半から8世紀前葉頃のものとして推定され、713（和銅6）年の美作国成立以前の官衙遺構であり、苫田郡衙に相当すると考えている。SB602・SC502は、郡庁を構成する一連の施設と考えられる。本時期の遺構は、国土座標第V座標系の方位に対し、8度余り東偏している。

美作国府Ⅱ期には、「政庁」を区画する東西溝SD102と塙SA108、東西棟SB101がある。SB101が用地のほぼ中央に位置するのに対し、SD102・SA108は北端付近に位置する。SB101は桁行7間、梁行2間の東西建物で、南側に庇状の施設が付属する。柱間は2.7m（9尺）等間で、2回の建て替えが認められ、SB101Aおよび同Bは掘立柱建物、同Cは礎石建物である。柱穴は一辺が1.2m程の方形掘り方をもつ。木建物は脇殿にあたる可能性がある。SA108もSB101と同様に2回の造り替えが認められる。前2者は掘立柱塙、最後に築地塙に変更されている。両者のこうした関係などから、これらの遺構は政庁に相当すると評価されている。Ⅱ期に属するその他の遺構としては、SB101の北側雨落ち溝である東西溝SD107と、この雨水をSD102に逃がすための排水溝SD503、SA108の南側雨落ち溝SD105がある。本時期の遺構方位は真北に近く、約1度58分東偏するにすぎない。

国府期に先行する遺構としてはSB101南東住居（SH855）と同南東溝（SD856）の一部が検出されている。これらは国府遺構と切り合っていることもあり、遺構検出にとどめ部分的な掘り下げしか行っていない。住居埋土からは片岩製石包丁未製品1点が、溝からは土器小片が出土した（註2）。いずれも弥生時代に属する。

国府期に後続する遺構としてはT1でSD105の南とSB101南東部で浅い土坑を検出したほか、多数の小柱穴を検出しているが、これらは古代末から中世にかけてのものと考えられる。

（1）遺構

今回の調査で新たに検出した遺構等については、850番台を付けた（第3図）。

A. 弥生時代

SH855 SB101の南東隅に位置する直径4.3mの円形住居址。国府遺構の保護のため、約半分だけ掘り下げを行った。4本柱と推定される。

SD856 SH855の南に位置する、長さ9m、幅0.8m、深さ0.3mの溝で両端は閉じている。

SD857 調査区中央の西寄りに位置する不整土坑状の溝で、底中央部は一段深くなっている。長さ3.2m、幅1.1m、深さ0.2m。

SD858 長さ9.3m、幅0.6m、深さ0.15mの溝で両端は閉じている。

以上のほかに数カ所の柱穴から弥生土器が出土している。土器は弥生中期中葉から後葉にかけてのものがほとんどで、一部に後期中葉のものを含む。

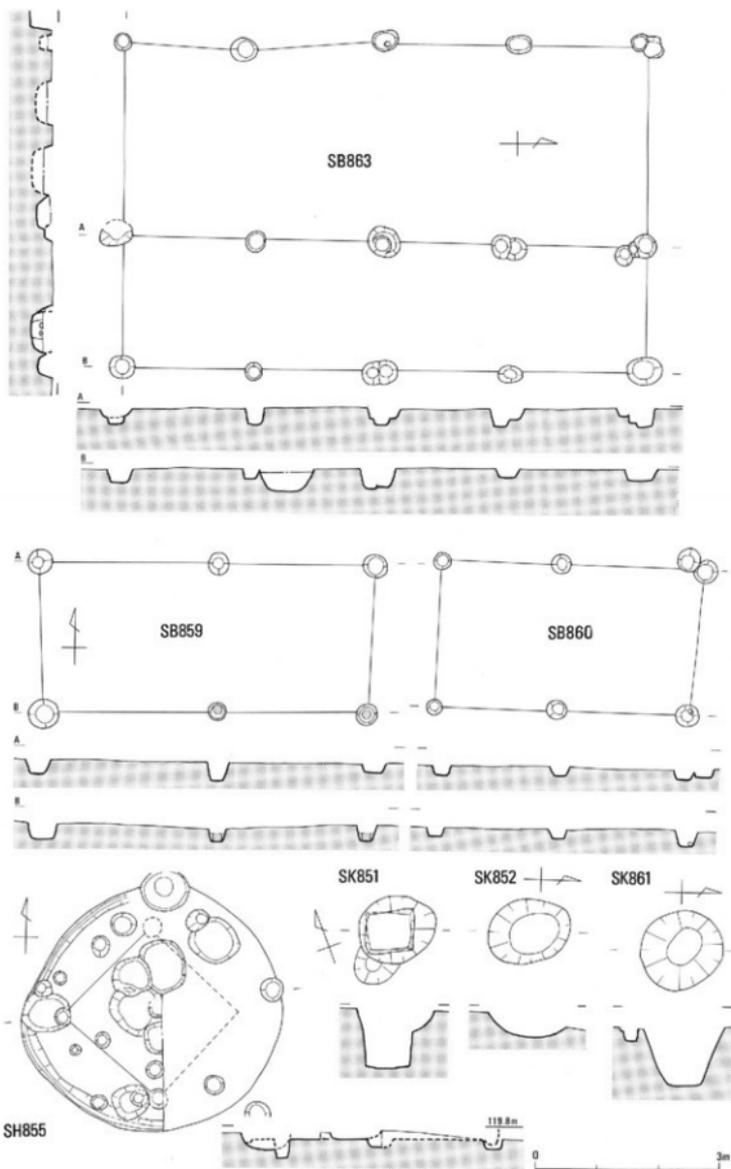
B. 国府Ⅰ期

南北塙SA109が、調査区の少なくとも南北端にまで達していることを確認した。柱穴からは混入とみられる土器片が出土した程度で、築造時期を示す資料は発見されていない。

SX862 調査区南東端で一部を検出した土坑で、垂直な壁とやや不規則な断面の底面をもつ。坑内下層には暗褐色土が堆積し、上層の褐色堆積土中には円礫が多数投げ込まれていた。粘土探掘坑とみられる。上層から土師器皿片が出土した。瓦の出土をみなかったため、ここではⅠ期に分類しておく。

C. 国府Ⅱ期

SD102、SA108、SB101の未調査部分を調査した。これらにかかわる新しい所見は認められない。



第4圖 遺構實測圖(1:80)

SA108の東端柱穴はI期SA109柱穴を切っていることを確認した。各遺構から少量の土器等の遺物が出土した。

D. 古代末—中世

SK851 直径1.2mの掘り方をもつ井戸で、深さ約0.9m。下半部には約0.7m四方の木杵痕跡を留めるが、杵材は遺存しない。掘り方の南西側は弥生時代柱穴を切っている。

SK852 長径1.35m、深さ約0.4mの浅い楕円形土坑である。

SK861 直径1.3mの円形土坑で、深さ0.95m。底面は不整形で、木杵等の痕跡は確認できなかったが、井戸の可能性はある。

SA853 SB855の北東に位置する3間の南北柱列。方位は国府Ⅱ期にはほぼ一致する。延長6.3m。

SA854 SA853の南に位置する、同規模の柱列。調査当初は両者合わせて一列の柱列と考えたが、方位がやや東偏することから別のものと判断した。位置関係からみて併存した可能性がある。

SB859 調査区南方に検出した2棟の掘立柱建物の西側のものである。桁行2間、梁行1間の東西建物。南東の2柱穴には柱痕跡が遺存した。柱の直径は15cm程である。

SB860 SB859とほぼ同形の東西棟建物。やや小形で東柱列が建て替えられている。両建物は桁柱列が通っていて、同時存在と考えられる。

SB863 桁行4間、梁行2間の南北建物で東に庇が付属すると思われる。本体の梁行が狭く、柱列のやや不揃いな箇所もあり、検討を要するかもしれない。

(2) 遺物

全域から、整理用コンテナ5箱分の土器、瓦等が出土した。遺構に伴うもののうち主要な遺物を選んで図示した(第5図)。

A. 弥生時代

SD856出土土器(13-20) 壺(13,14,19,20)、甕(16,17,18)がある。15は小形の壺ないしは鉢と考えられる。弥生Ⅲ期新段階墳からⅣ期古段階に属する。20は大形の短頸壺と思われるが、器台脚の可能性もある。

SA109出土土器(21,22) 国府Ⅰ期の遺構であるSA109の柱穴P24に混入していたもので、丹塗りを施した長頸壺(21)と台付鉢(22)がある。弥生Ⅴ期中葉に属する。台付鉢は当地域には類例をみない。

B. 国府Ⅰ期

SX862出土土器(12) 土師器皿で、外面はヘラ削りした後、ヘラ磨きを施す。既出の資料ではSK706出土皿(註1)に似るが、丹塗りは施さない。

C. 国府Ⅱ期

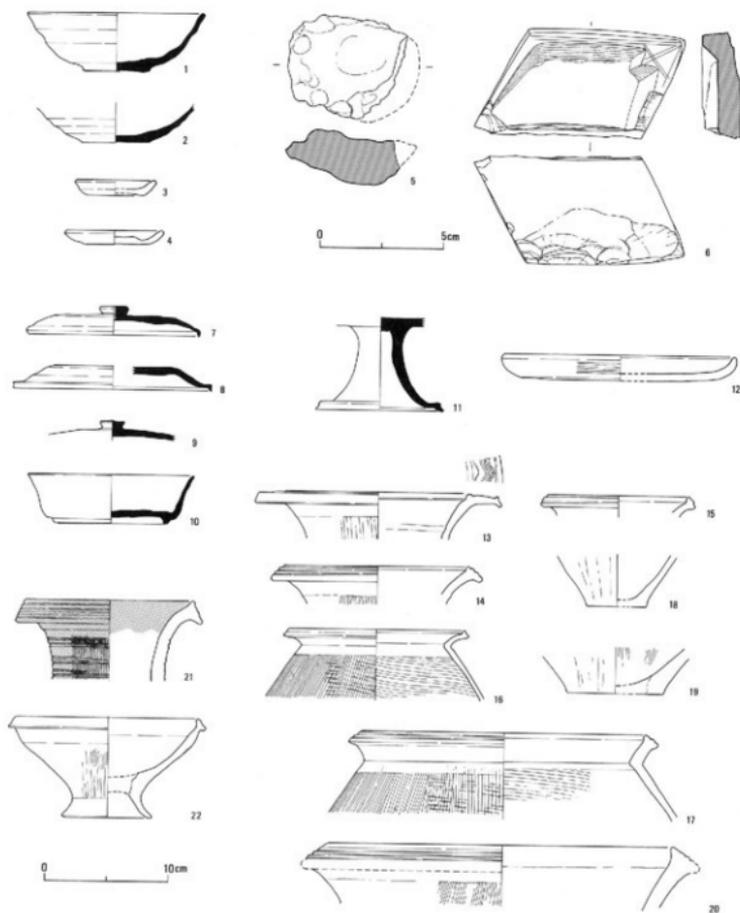
SB101出土土器(7,8) 須恵器坏B蓋で、P12とP7から出土した。いずれも硯に転用されている。

SD105出土土器(9) 須恵器坏B蓋。硯に転用されている。

SD102出土土器(10,11) 須恵器坏Bと須恵器高坏。

D. 古代末—中世

SK861出土遺物(1,5,6) 糸切り底をもつ須恵器椀A(1)、椀形洋(5)、石硯(6)がある。石硯は黒色の粘板岩製で、筋理に沿って割れた平行四辺形の素材に規制された特異な形状をもつ。3側面には筋理面を留める。縁部に浅彫りの修飾を施す。中央の表裏から切り込みを入れて半裁し、砥石に



第5図 遺物実測図(土器1:4、鉄滓・石硯1:2)

転用している。

SA854出土土器(2-4) 須恵器碗A(2)、糸切り底の土器皿A・(3,4)がある。2,3は南端柱穴か

ら、4はその北側柱穴から出土した。

その他、SB859北側の柱穴群の一つからは須恵器碗と羽口が出土したが、いずれも小片のため図示できなかった。

4. まとめ

今回の発掘調査によって、本地区の全容が明らかとなった。国府期に関しては、基本的に従来の知見を追認するもので、SX862以外に新しい遺構等の発見はない。国府Ⅰ期のSA109は、調査区の南北に延びることが明らかとなった。国府Ⅱ期の中心施設のひとつであるSB101からは、少量だが須恵器の出土をみた。

国府期以後の遺構については、3棟の建物と2本の柱列を確認した。建物規模や柱材の大きさからみて、これらの施設は官衙ではなく通常の住居とみるのが妥当と思われるが、いっぽうで石硯のように「官衙的」な遺物の存在も認められる。また、羽口や鉄滓の出土からこれらの遺構を残した人々は鍛冶を行っていたことが知られた。

(安川豊史)

註

- 1 安川豊史『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集 1994年
- 2 安川豊史「美作国府跡出土の弥生土器」『古代吉備』第17集 1995年

津山高校創立百周年記念館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1. 調査にいたる経過

津山高校創立百周年記念館建設予定の津山市椿高下87-1、88-1番地はこれまで文化財保護法でいうところの周知の遺跡扱いがなされていない場所であった。ところが、岡山県古代吉備文化財センターが平成5年から実施した津山高校校舎改築に伴う埋蔵文化財発掘調査では、十六夜山古墳以外にも弥生時代から近世にかけての遺跡が広がっていることが確認された。

特に、近世津山城下町時代の遺構がよく残っており、その拡がりは百周年記念館建設予定地にも及ぶことが予測された。このため、津山市教育委員会としては平成7年12月22日、遺跡の有無を確認するため、バックホーを借り上げトレンチによる確認調査を実施した。

確認調査の結果、建設予定地全域に近世を中心とした遺跡が広がっていることが判明し、平成8年1月12日から本調査を実施することになった。

2. 調査の経過

調査は表土の搬出が困難なため、北調査区と南調査区の2区に分けて実施した。最初に南調査区から着手した。まず、表土を北調査区へ盛り上げ、南調査区の調査終了後、北調査区の土を南調査区に移動するという方法で調査を実施した。

例年になく大雪と寒さに悩まされた。以下、主な調査の経過は次のとおりである。

平成7年12月22日 確認調査

8年1月9日 遺跡発見届提出

1月11日 埋蔵文化財発掘調査通知書提出

1月12日 南調査区表土剥ぎ

1月16日 発掘器材搬入

1月17～26日 遺構掘り下げ

1月29日 全面清掃 写真撮影 実測

1月30日 実測 南調査区終了

1月31日 北調査区表土剥ぎ

2月1～12日 遺構掘り下げ

2月13日 全面清掃 写真撮影

2月14～15日 実測

【確認調査担当】 中山俊紀

【本調査担当】 行田裕美

【発掘作業員】 津山市シルバー人材センター

稲垣光男 稲垣裕史 森二三夫 谷口末男

藤沢淳一郎 梶尾嘉明

【本調査協力】 津山弥生の里文化財センター

中山俊紀 安川豊史 青木睦子 小郷利幸

坂本心平 野上恭子 岩本えり子 家元弘子 河本雅子 平岡正宏



第1図 位置図(S=1:25000)



第2図 調査地位位置図(S=1:2000)

調査から本報告作成にいたるまで、次の方々から指導助言をいただいた。記してお礼申し上げます。
宗森英之 赤木和郎 古市秀治 井上 弘 金田善敬 小谷普守 尾島 治 尾上元規 亀田修一
池上 博

3. 調査の概要

調査の結果、調査地は弥生時代から古代、中世、近世、近・現代にわたる複合遺跡であることが判明した。主要な遺構の時期別分布は第4～7・11図に示したとおりである。

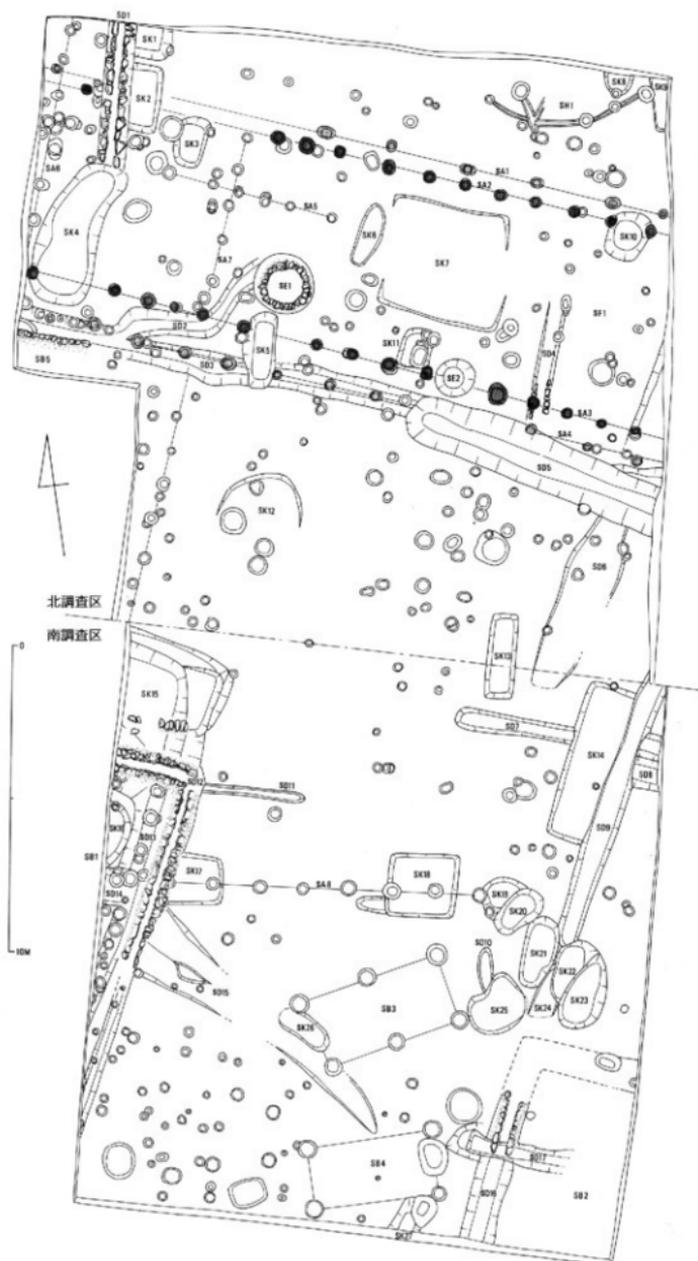
以下、各時代ごとに概要を記すことにする。

弥生時代(第4図)

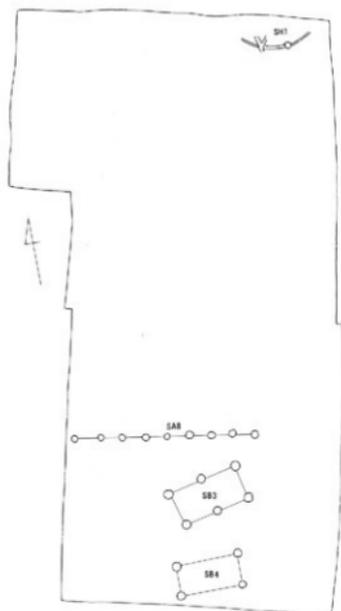
弥生時代に属するものには住居1軒(SH1)、建物2棟(SB3・4)、柱穴列1(SA8)がある。堅穴住居SH1の壁は失われており、壁体溝及び柱穴が一部確認されただけである。推定復元すると、径約8mの円形住居にならうか。SB3は1間×2間の建物である。梁間は2.3m、桁行は4.5mを測る。SB4は1間×1間の建物である。梁間は2m、桁行は4.2mを測る。柱穴列SA8は柵と考えられる。調査区内では柱穴9個を確認したが、さらに西側に延びる可能性もある。

この他にも、調査区の南側において柱穴と考えられるピットをいくつか検出したが、建物あるいは住居などの配置を示すものは認知されなかった。

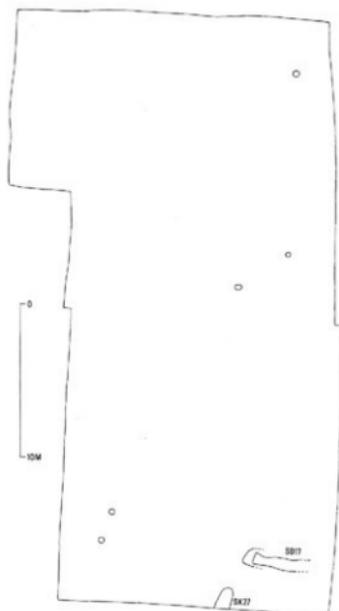
これらの遺構から若干量の土器片が出土している。



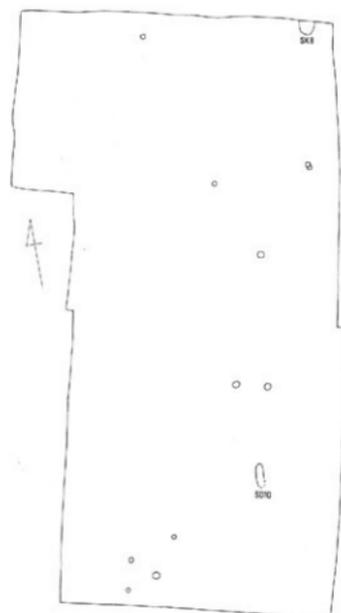
第3図 遺構全体図(S=1:160)



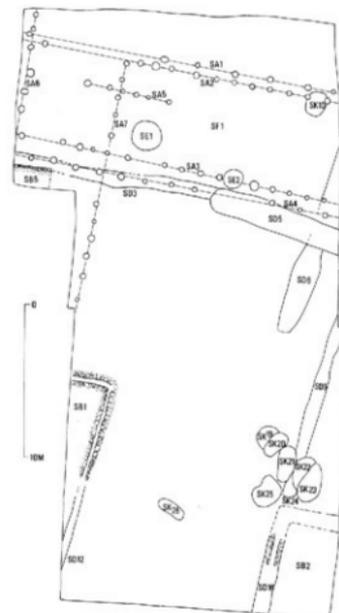
第4圖 彌生時代遺構分布圖(S=1:320)



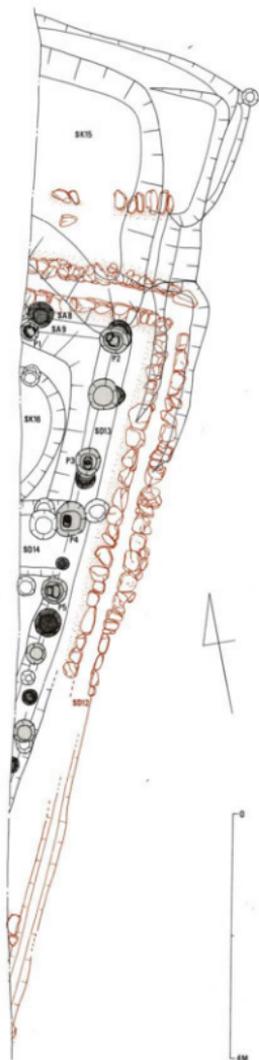
第5圖 古代遺構分布圖(S=1:320)



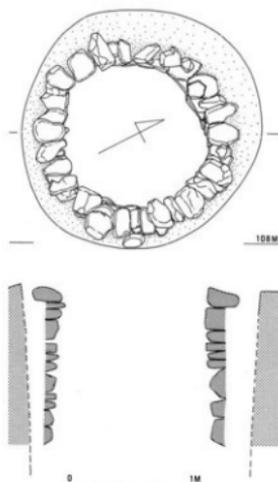
第6圖 中世遺構分布圖(S=1:320)



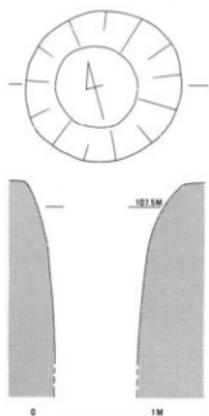
第7圖 近世遺構分布圖(S=1:320)



第8図 屋敷跡1平面図(S=1:80)



第9図 井戸1平面・断面図(S=1:40)



第10図 井戸2平面・断面図(S=1:40)

古 代 (第5図)

古代に属する遺構としては、溝(SD17)、土壌(SK27)の他にピット数個があるが、いずれも性格は明らかでない。出土遺物は瓦が中心で、遺物収納用コンテナにして1箱分が出土した。特に、SD17からまとまって出土した。

遺物はこの他にも近世の遺構に混じって、ほぼ全域から若干量出土している。

中 世 (第6図)

中世の遺構も古代同様密度が低い。土壌(SK8)、溝(SD10)の他はピットである。遺構の性格は不明である。遺物は勝間田焼を中心に若干量が出土した。

近 世 (第7図)

本遺跡の中心はあくまでも近世である。調査区北側には東西方向に道路(SF1)が走る。道路に面して南北に築地と考えられる2時期の柱穴列(SA)を検出した。北側にはSA1とSA2が、南側にはSA3とSA4が位置する。柱穴の位置関係からSA1とSA4、SA2とSA3が対応するようである。新旧関係

は不明であるが、SA1とSA4の時期の道路幅は約7.5m、SA2とSA3の時期の道路幅は約6mである。さらに、道路の南側には西部にSD3、東部にSD5の2本の溝が道路に平行して位置する。SD3は浅いが、SD5は深く、遺構検出面から1m前後を測る。また、道路に直交してSA

6・SA7の柱穴列があるが、時期の異なる道路の築地となるのか、別々の構列となるのかは不明である。

道路の南側に3軒の屋敷跡（SB1・SB2・SB5）を確認した。いずれも石組みの溝だけであるが、屋敷の区画割を兼ねた排水溝であると考えられる。SB5は道路に面して位置する。SD3が雨落ちの排水溝と道路の側溝を兼ねたものと考えられることから、このときの築地はSA3であろう。SB1は道路から南へ約13m、SB2は20m程の所に位置する。道路に面した屋敷割り構造にはなっていないが、屋敷の並びは道路に平行している。

SD6・SD9の溝は性格不明であるが、道路に直交し、屋敷の区画割とも平行することから近世に属するものであろう。

この時期の遺構は基本的に道路を基準に平行ないし直交するのが特徴である。

土壌SK19～26はいずれも不整形な平面プランを呈し、底面は礫である。礫面より下には掘り込まれていない。壁は平面プランより奥に掘り込まれており、断面形は卵形を呈す。地山は粘質土である。津山郷土博物館所蔵の18世紀前半頃と考えられる絵図には、現津山高校の西南あたりに「土取場」という区画がみられる。これらのことから土壌の性格は粘土採掘場と考えるのが妥当と思われる（註1）。

道路と重複して井戸（SE1・SE2）、土壌（SK10）、柱穴列（SA5）が位置する。SE1は径1m強の石組みである。崩落の恐れがあり、全掘することができなかった。SE2は石組みをもたない素掘りのものである。壁面に円形の井戸枠がわずかに遺存していた。遺構確認面から1.5mまで掘り下げたが、底面までは達しなかった。底径は65cmである。SK10は深さ1.4m、底径90cmである。SK10、SA5とも性格は不明である。

近・現代（第11図）

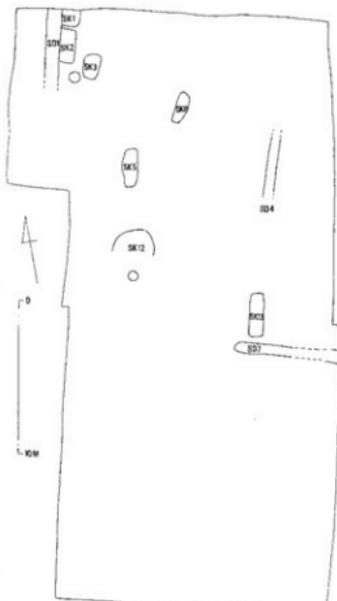
南北溝（SD1）は調査前の現代の屋敷境の溝である。他の遺構もこの屋敷の時期に伴うものである。この時期の特徴は、屋敷割りが現在の町割りに平行ないし直行し、近世と比べるとかなり西偏し、より東西南北に近い構造になっていることである。

4. 出土遺物

遺物は遺物収納用コンテナにして8箱分出土した。時期は弥生時代から現代にわたるが、大半は近世に属するものである。以下、各時代ごとに特徴的なものについて概要を記すことにする。

弥生時代

いずれも小破片で図示できるものはないが、弥生時代後期に属するものである。



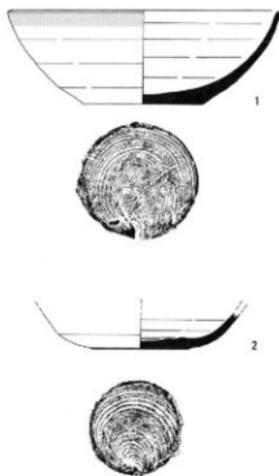
第11図 近・現代遺構分布図（S=1:320）



第12圖 古代瓦実測圖(S=1:3)

古 代 (第12図、図版4)

古代に属するものはほとんどが瓦である。1・2は軒丸瓦である。1は複弁8弁蓮華文で五反庵寺出土のものと同型式である(註2)。溝SD5から出土した。2は素弁8弁蓮華文に復元される。二宮大成遺跡出土のもの(註3)と大崎庵寺出土のもの(註4)との中間の様相を呈している(註5)。3は軒平瓦である。瓦当面は飾らず切り離しのままである。凸面には瓦当面から2cmの所に突帯が付く。類例は賞田庵寺出土のものに求めることができる(註6)。2・3ともSD17からの出土である。4・5は凹面布目、凸面ヨコハケの丸瓦である。6~12は平瓦である。6の凸面が格子叩きである他は全てヨコハケである。内面はいずれも布目である。4~12はSD17及びビット等からの出土である。いずれも白鳳時代に属するものである。



中 世 (第13図、図版5-1)

勝岡田焼の他に土師質土器が少量含まれる程度で、遺物の量としては少ない。1・2は勝岡田焼碗である。3は白磁碗である。1は上瀬SK8、2・3はビットから出土した。勝岡田焼碗は伊藤編年のⅢ期に相当することから、13世紀という年代観が得られる(註7)。これは白磁の年代観からも肯定されるものであろう。



第13図 中世遺物実測図(S=1:3)

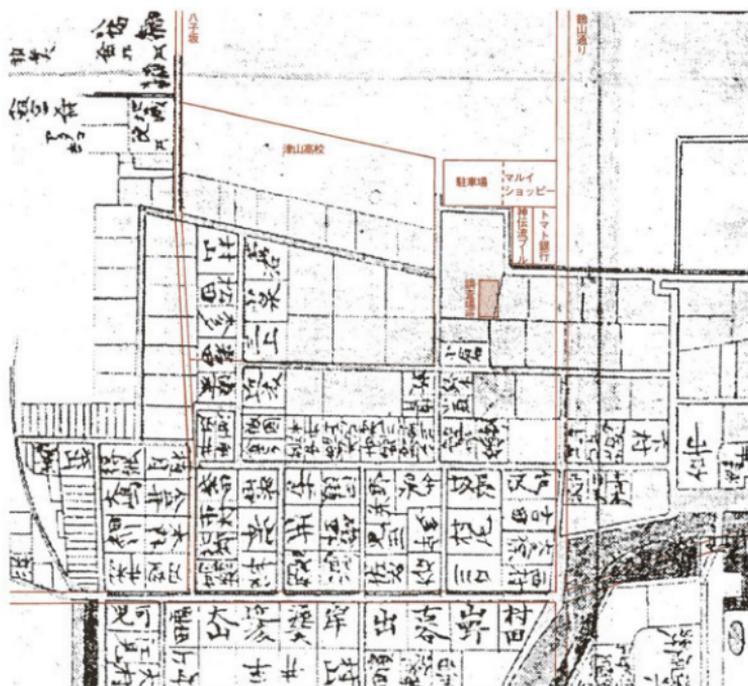
近 世 (図版5-2、図版6-1・2、図版7-1・2)

図版5-2は土師質土器である。1は焼塩甕の蓋と考えられる。2~9は皿である。いずれも回転台を用いて作成されたものであり、底部には糸切り痕を残している。2・5・7~9は灯明皿として用いられており、口縁部にススの付着が認められる。これらの土師質土器は16世紀から17世紀にかけてのものと考えられる(註8)。1・5・8・9はSK15から、2・3はSD12から、4はSK21から、6・7はSD9から出土した。

図版6-1は陶器皿である。1・2の内面には蓮葉文、3には折れ松葉文が描かれている。4~7は無文であるが、重ね焼きの際に生じる砂目が見られる。いずれも唐津と考えられるもので、時期的には17世紀の範疇に納まるものである。1・3はSD5、2はSK15、4・6・7はSD9、5は柱穴から出土した。

図版6-2は陶磁器類である。1は伊万里網目文椀である。2は唐津天目茶碗である。5・6は唐津皿である。3・4・7は陶器椀であるが、所属窯は不明である。これらはいずれも17世紀代の中に納まるものである。1~3はSK15、4はSK4、5・7はSK21、6はSK19から出土した。

図版7-1の1~4は備前摺鉢、5は丹波臺の破片の外表面であり、図版7-2はその内表面である。摺鉢は非常によく使用されており、内面が摩滅している。時期的にはやはり17世紀に属するものである。1・3はSD5、2はSD15、4はSK7、5はSK22から出土した。



第14図 嘉永7年橋高下周辺町割図と調査地の位置関係

5. まとめ

津山高校校舎の改築に伴い、岡山県古代吉備文化財センターが実施した発掘調査の報告書が刊行されたので(註9)、この報告書に盛り込まれた成果と比較検討することによってまとめたい。

弥生時代

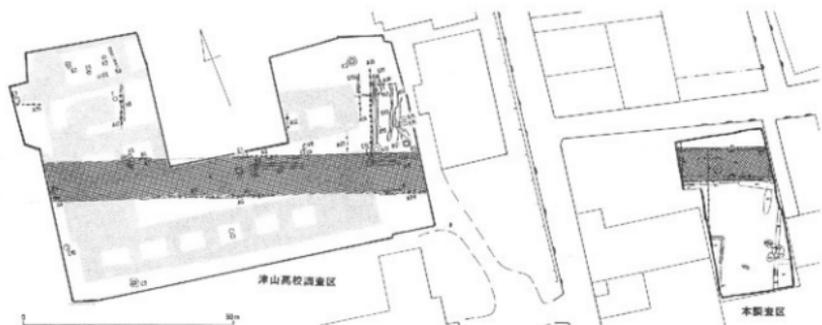
津山高校調査区では住居3軒が検出されている。本調査区でも住居1軒、建物2棟他が見つかる。いずれも弥生時代後期に属するものである。両調査区は直線距離にして100m程である。これらのことから弥生時代後期の時期には両調査区にまたがるかなり大規模な集落が存在していたことが予測される。また、この地域は吉井川の河岸段丘に相当する高台にあり、地理的にも集落立地の好条件をそなえているといえる。

古 代

本調査区では軒瓦を含む白鳳時代の瓦が出土した。津山高校調査区においても凸面ヨコハケの平瓦が出土している。いずれの調査区とも寺院址を想定させる遺構は検出されていないが、白鳳時代の寺院址が想定される。

中 世

中世の遺構遺物は本調査区だけで津山高校調査区では認められない。本調査区でも決して密な状況は



第15図 津山高校調査区と本調査区検出道路の位置関係

ない。従って、少なくともこの地域に限って言えば人影まばらな時期であったといえることができる。

近 世

本調査区及び津山高校調査区の位置する津山市椿高下は、もと武家屋敷のあった場所で津山城下町の最も北に位置する。この椿高下の町割りには寛文年間（1661～72）には完成したものと推定されている（註10）。この時の町割り、特に道路の位置関係について絵図との対比で考えてみたい。いくつかの絵図が知られているが、基本的には同じ道路配置になっている。津山高校調査区では絵図どおり東西道路が検出された。この道路は絵図による限り、現在の津山高校正面玄関の南北道路に取り付き終結し、これより東に延びることはない（第14図）。ところが、津山高校調査区で確認された道路はそのまま本調査区にまで延びていることが判明したのである（第15図）。

この道路は全くの東西方向ではなく、北西から南東方向を指している。絵図によると、道に面した屋敷割は南北方向を指しており、道に直交した配置になっていない。ところが、二つの発掘調査区とも道に直行した屋敷配置になっているのである。これはどう理解したらいいのだろうか。結論は出ないにしても、いくつかの可能性を考えてみたい。

まず、時期的な問題であるが、絵図以前の状況と考えることができる。最も古い絵図を18世紀前半とすれば、それ以前。さらに言えば、椿高下の町割りが完成したと推定される寛文年間、すなわち、17世紀後半以前とすることはできよう。また、津山高校調査区では16世紀末～17世紀初め頃製作された陶磁器類が出土している。これらのことから、椿高下の町割り完成以前に今回の発掘調査で確認された道路、道路に直交した屋敷が存在していたことが考えられる。

では、これらの道路なり屋敷はいつ頃まで遡るのであろうか。初めに屋敷の存在について考えてみよう。津山高校調査区及び本調査区を合わせて、最も古い遺物は16世紀末～17世紀初め頃の時期のものであり、これより遡るものはない。この時期はちょうど院庄に居を構えた森忠政が津山城の築城に着手した時期である。『森家先代実録』によると、「忠政君ハ城廻張升形馬出堀町割等の御工夫に日々院庄より御馬にて御通ひ」という記事がみられる。この記事から忠政は築城あるいは城下町形成にあたって、腰懸城である院庄から毎日現地に赴き陣頭指揮をとったことが考えられる。そして、陣頭指揮をとる臨時的居住地、換言すれば今で言う工事の現地事務所的屋敷が椿高下一帯に置かれたのではないかと考えたのである。この時の屋敷は道に直行する形でおかれてる。この場所は城の北西方向500mの位置にあ

り、城下町中最高所にあたる。城はもちろんのこと城下町を眼下にすることのできる絶好の場所である。

次に道路であるが、結論的には城下町形成以前すなわち中世段階にあったものを踏襲し、城下町形成時に組み入れたものと考えたい。椿高下の南東方向には津山城築城以前の山名時代の山城があったこと、また北西方向には総社宮等があることから、当然これらを結ぶ道路が存在していたものと考えられる。

そして、最終的に城下町としての椿高下が形成される段階で、道路はそのまま取り入れ、屋敷は南北方向の町割りを採用したものと考えられる。

6. おわりに

予算も期間も厳しい緊急調査であったため、十分納得のいく発掘調査の実施、報告書の刊行は果たせなかったが、関係者各位のご協力により、何とか体裁を整えることができたと考えている。

最後に、会議室あるいはお茶の提供を快く引き受けていただいた津山高校関係者に心よりお礼申し上げます、おわりといたします。

(行田裕美)

(註1) 宗森英之氏のご教示による。

(註2) 湊 哲夫『美作の白鳳寺院』津山郷土博物館1992年

(註3) 山野耕平・栗野克己・泉不知秀『二宮大成遺跡』『岡山県考古文化財発掘調査報告6』岡山県教育委員会1974年

(註4) 出宮徳尚・伊藤 晃・岡本寛久・駒井正明・丸山文『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社1992年

(註5) 亀田修一氏のご教示による。

(註6) 出宮徳尚他『真田鹿寺発掘調査報告』岡山市教育委員会1971年

(註7) 伊藤 晃『鹿 鹿』『岡山県の考古学』吉川弘文館1987年

(註8) 近世の遺物の年代については、森岡 実氏に実見していただきご教示いただいた。

(註9) 尾上元規・金田善敬『十六夜山古墳・十六夜山遺跡 県立津山高等学校校舎改築に伴う発掘調査-』『岡山県考古文化財発掘調査報告130』岡山県教育委員会1998年

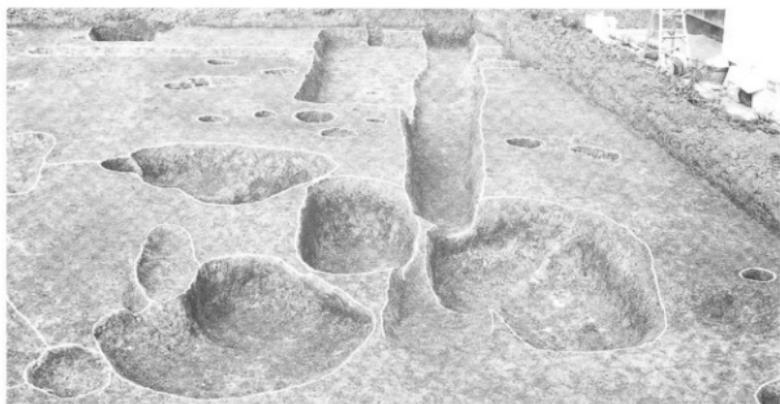
(註10) 宗森英之氏のご教示による。



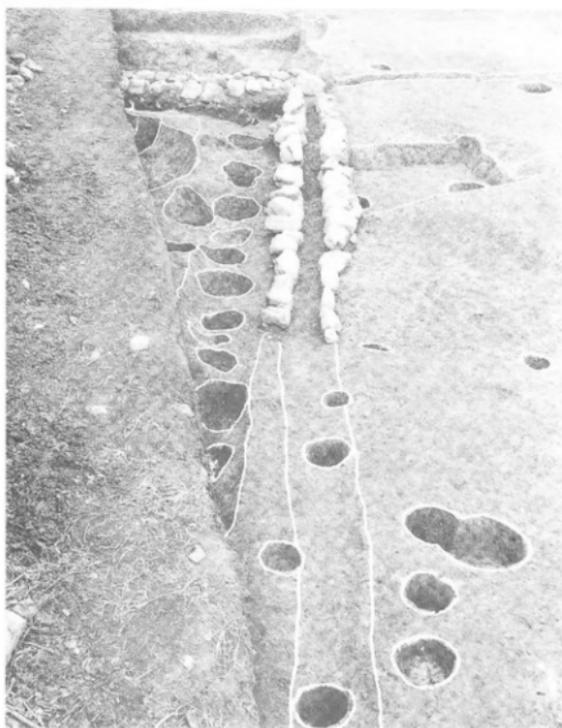
南調査区全景(北から)



建物址(西から)



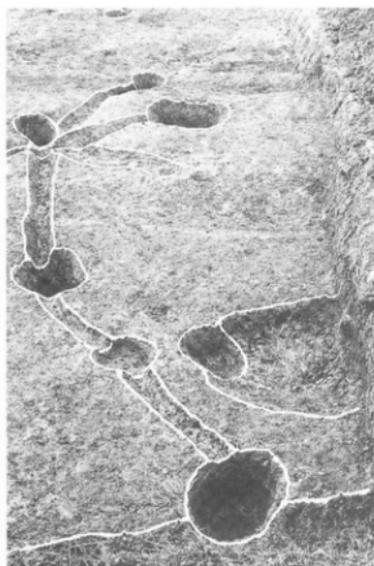
粘土採掘場(南から)



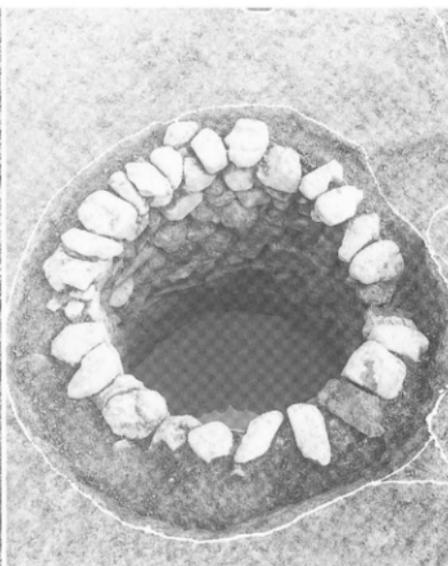
屋敷跡 1 (南から)



北調査区全景(西から)



住居址(東から)



井戸1(北から)



1



2



3



3



4



5



6



7



8



9



10

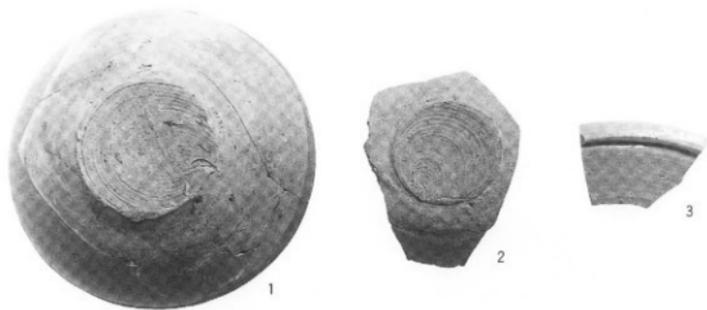


12



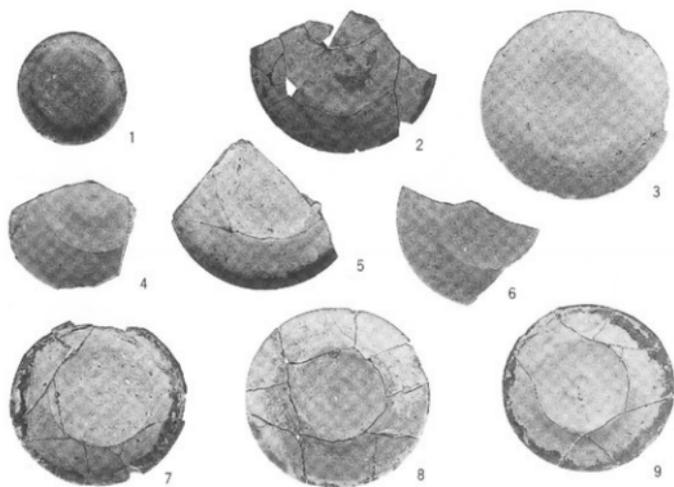
11

出土遺物(1)



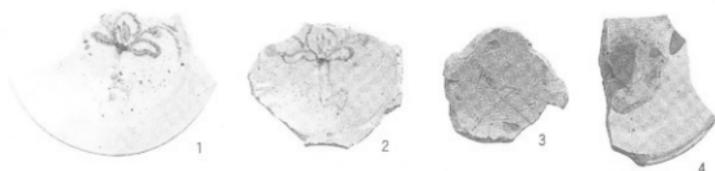
出土遺物(2)

1



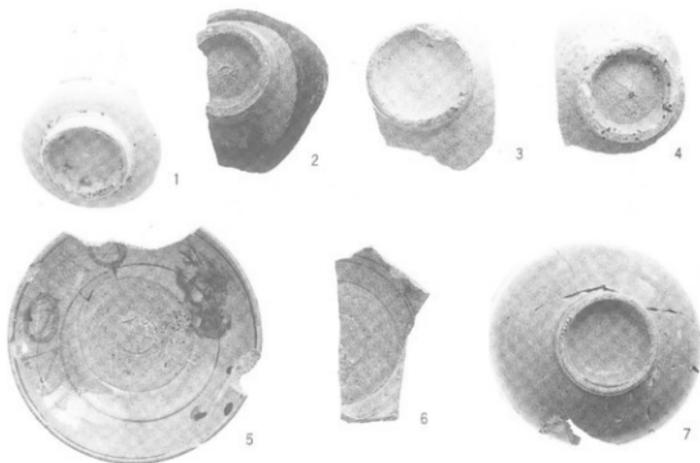
出土遺物(3)

2



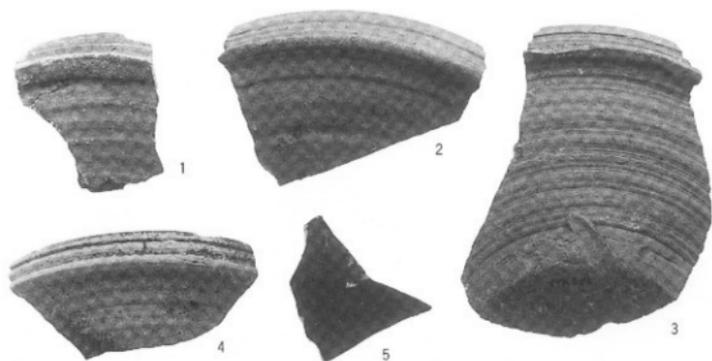
出土遺物(4)

1



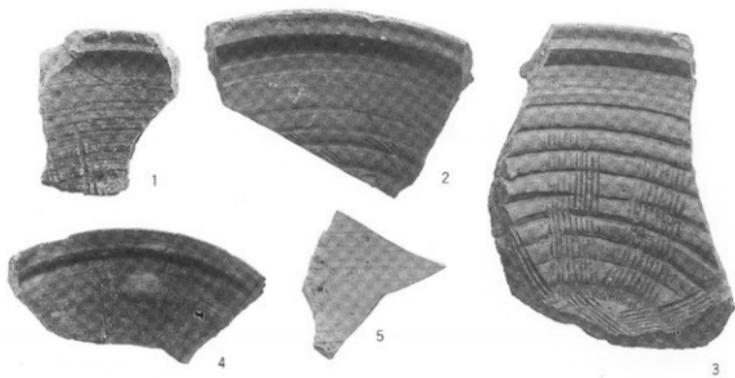
出土遺物(5)

2



出土遺物(6)(外面)

1



出土遺物(6)(内面)

2

津山市街地再開発事業に伴う発掘調査

1. はじめに

津山市街中央の元魚町商店街のあたりは江戸時代からの町屋の跡であり、現在もその町割りが良好に残っている。

その元魚町商店街の中央部において、中央街区市街地再開発事業が計画された。その事業に先立ち、地下遺構の遺存状況を確認するため、トレンチ調査を実施することとなった。

また近世津山域下町が形成される以前に「富川村」或いは「富川宿」と呼ばれる物資の集散地が存在したことが知られており(註1)、その場所は調査地域に隣接する現在の戸川町付近に推定されているが、物証はなくその実態は不明である。

そのため近世の遺構のみならず近世以前の遺構の確認も視野に入れながら、遺構の有無を確認するために2箇所にトレンチを設定し調査を行った(第1図)。調査面積は約100㎡、調査期間は1997年2月14日～3月4日までである。



第1図 調査区位置図(1:北調査区、2:南調査区、S=1:10000)

2. 調査の概要

a. 北調査区(第2図)

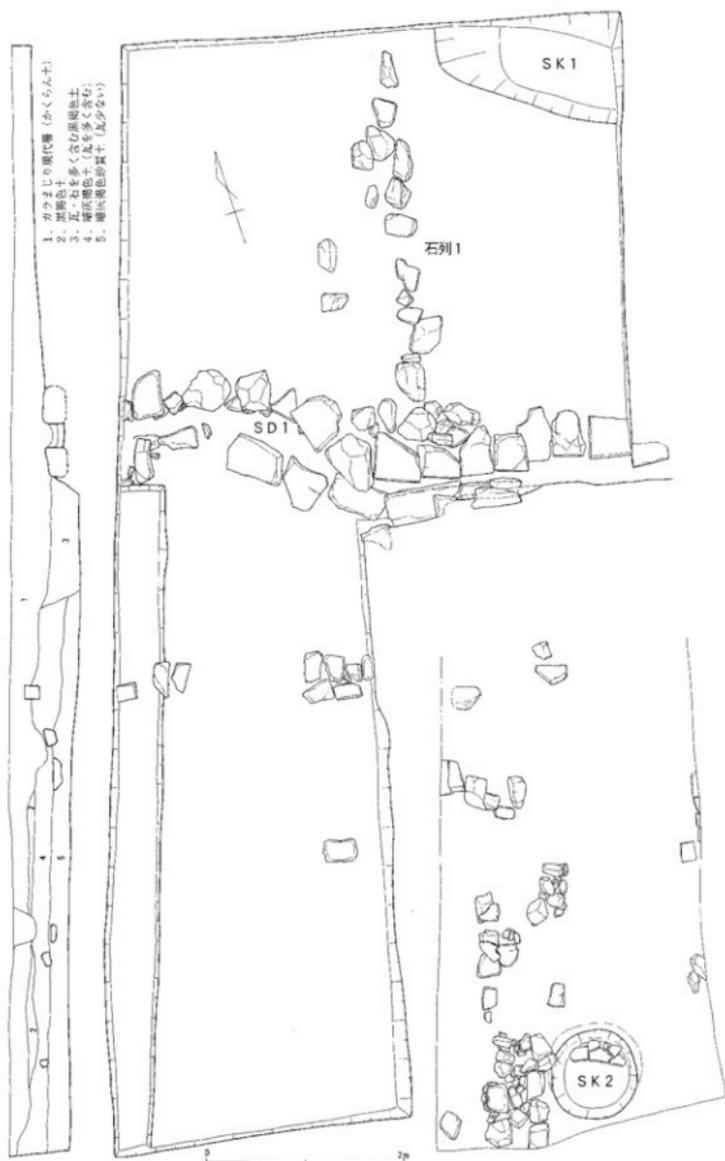
上層の遺構

北調査区は東西3～5m、南北11mの調査区である。調査区の中央を横断するように、東西方向の町屋の境界と考えられる石組みの溝が確認された(SD1)。溝の両側は一辺40～50cm程度の石を使用しており、幅は30cm程度、深さは東側で40cm程度である。この溝はS字状に南北にやや蛇行している。さらに溝東半北側の石7個は現状ではやや歪んでいるものの、溝に面した側及び上面を直線的に揃えており、更に東から7個目の石は南西の角を直角に作っている。但し東3石は一段(40cm程度)低くなっている。これらの石については礎等の建物の土台の石の可能性がある。

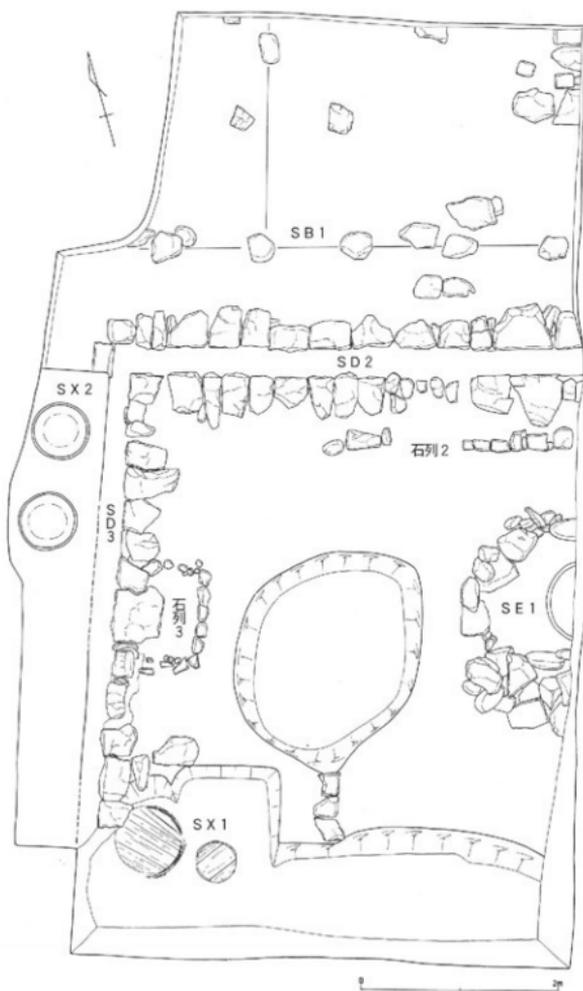
溝より北側の北東隅部分に土壌SK1が存在する。規模は東西2m以上、南北1m以上深さ80cm程度である。性格は不明である。またSD1から北へ延びる石列(石列1)があるが、石の上面が揃っておらず、礎石列ではないようである。また溝より南側では扁平な石数個を確認したが、建物の礎石として並ぶものとは確認できなかった。

下層の遺構

調査区南半では下層の遺構を確認した。南端部に土壌SK2が存在する。SK2は径90cm、深さ20cmで、土壌北半の周辺は焼けて赤変している。また土壌中に存在する石数個も焼けている。



第2図 北調査区全体図 (S=1:50)



第3図 南調査区全体図(S=1:50)

る(SD3)。その構造はSD2と変わることはないが、西側の石はその上面をコンクリートに覆われ、存在は明らかではない。

SD2よりも北側には径30cm内外の扁平な礎石とみられる円礫が数個存在しているが、その中には規則的に並ぶもの(SB1)が認められる。SB1はSD2から北へ約1mの位置で溝と平行に約1m間隔で5個の礎石が存在し、西から2個目の礎石の北約2mにさらに1個の礎石が存在する。建物の規

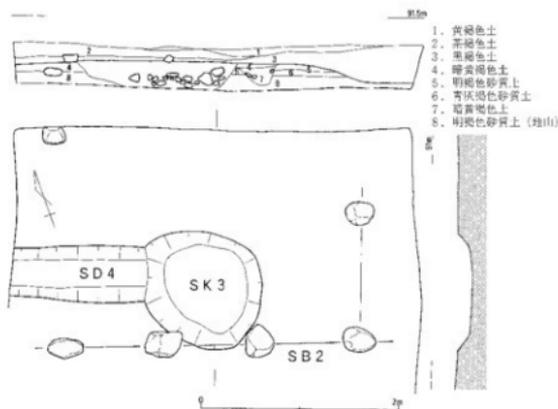
SK2の東には130cm×70cm程度の集石が存在する。この集石からさらに北へまばらに石が認められるが、いずれも建物の礎石とはならないようで、性格は不明である。

b. 南調査区

上層の遺構

(第3図)

南調査区は東西6m、南北10mの調査区である。この部分では、調査区中央において東西方向の幅約30cm、深さ10cm程度のやはり町屋の境界の溝と思われる溝が確認された(SD2)。この溝は南北両面ともに1段の石を溝側に面を揃えて置き、床面はタタキ仕上げとしている。この溝は調査区西端付近で南に折れて南北方向の溝とな



第4図 南調査区北半下層平面図・北壁土層図(S=1:50)

構・性格については不明である。

SD 2よりも南側ではその中央部及び南端付近が大きく攪乱されていたが、幾つかの遺構が確認できた。調査区東壁に接して井戸状の遺構(SE 1)の半分が確認できた。これは径1.2m程度に石組みの遺構であり、中央部には径約80cmの新しいコンクリート製の土管が埋められていた。

但し井戸としてはやや石組が不整で粗雑である。またSD 2より南約80cmのところには溝に平行して拳大の石を2.5メートルにわたって並べている(石列2)。途中約80cmは途切れているが、この部分はSD 2の南石組みが小さくなっており、あたかも通路状になっている。さらにSD 3に接して東西60cm、南北110cmに「コ」の字状に拳大の石を並べている(石列3)。こちらもあたかも出入のための通路状である。

調査区の南端1.5メートル程度は大きく攪乱されていたため、この部分については深く掘り下げたところ、遺構面から40cm程度の深さで砂礫層に達し、水が湧き出した。ここでは砂礫層上面において径70cmと40cmの木桶の底部が出土した(SX 1)。この木桶の北側には掘り方が認められた。大小セット関係になっているということは、便所の遺構であろうか。

また調査区西端部分は前述のようにコンクリートに覆われているが、その中に径60cmの素焼の甕が2個埋められている(SX 2)。これも便所の遺構であろうか。

下層の遺構(第4図)

調査区の北半、すなわちSD 2よりも北側については上層よりも20~30cm下層にも遺構が認められた。SB 2はSB 1の礎石列に重複するようにやはり1m間隔で礎石が4個存在し、一番東の礎石の北1.3mに礎石が1個存在する。また中央部には径1.2m・深さ20cm程度の不整形円形のSK 3とそれに接続する東西方向の溝SD 4が認められた。SK 3には拳大から人頭大の礎が入っており、SD 4はSK 3の方向へ傾斜している。ともに性格は不明である。

3. 遺構の位置付け

a. 絵図との対応

調査地点の旧地名については北調査区が元魚町、南調査区が新魚町に相当する。津山市誌には町名の由来を次のように記す。

「元魚町は町づくりの初め魚商を置いたため、魚町と呼ばれたが、のちに南に新魚町ができたので古魚町、後に元魚町となったという。徳守神社境内の住吉神社にある寛文年間の石灯籠に古魚町とあり、

元禄十年の改書には元魚町となっている。また一説には、この町ははじめ「一日」と称したのが魚商の町として魚町となったともいわれる。新魚町については、元魚町の南を東西に通る通りであり、魚商を集めて店を開かせたので、この名がついたという。延宝2年の開設といわれ、後長く魚類の販売はこの町に限定された(註2)。

江戸中期(18世紀中頃から後半)の絵図面によると、北調査区は間口4間、奥行き17間の「古川屋宗助」、間口4間の「藤屋(えびらや)善十郎」の付近に位置し、SD1がその町屋の境界とはほぼ一致する。

南調査区については間口6間、奥行き16間の「茂浅庄左衛門」持ちとなっている。ところが絵図の「間口6間」によると町屋の境界は南調査区南端の大きく攪乱されていたあたりに存在することになる。そのため少なくとも江戸中期においては南調査区で確認した町屋の境界と考えられるSD2・SD3は存在していなかったことになる。

b. 富川宿について

前述のように、鶴山(津山城)の西南、河岸に沿った低地に「富川村(後に戸川と書く)」に宿場・市場ができ、水陸交通・物資集散の要地として元龜・天正の頃栄えたという(註3)。

今回のわずかな面積の2個所の調査の所見による限りでは、近世以前に遡る遺構・遺物は認められなかった。特に南トレンチの南端においては江戸期の遺構の下はすぐに砂礫層で湧水があり、吉井川の氾濫原であったと考えられる。そのため、この付近には江戸時代よりも遡る遺構は存在しないと考えられる。

「富川宿」の所在はなお不明のままである。

(河田裕美・平岡正宏)

註1 「津山誌」[新訂作樂誌 八]

註2 津山誌第二巻五世I～幕府時代～p.54～56

註3 津山誌第二巻五世I～幕府時代～p.28



北調査区全景(北から)



北調査区全景(南から)



SD 1(西から)



南調査区全景(南から)



南調査区北半上層(西から)



南調査区北半上層(東から)



SD 2・SD 3(東から)



南調査区北壁土層図

2. 資料紹介・研究ノート



津山の弥生土器3（器台形土器）

中山 俊紀

中期の器台形土器

美作地方で発見された大形の器台形土器で、今のところもっとも古い例は美作町高本遺跡1号住居址出土のものであろう（1）。口縁部を欠くが、伴出土器から中期中葉に遡るとみられ、胴部及び脚部に凹凸の激しいいわゆる凹線文が巡らされている。

津山市では、これに続く器台形土器として紫保井遺跡（2）や崩塚遺跡（3）例、後葉のさらに新しいものとして押入西遺跡やビシャコ谷遺跡でほぼ完形に復元できる同種の個体が発見されている。

これらは同形同大の大形器台で、特に特殊な土器というわけではなく、その破片は美作の中期後半の集落遺跡ではよく見かけられる。当該期の弥生土器構成上不可欠な要素であると考えられ、成立当初から大きな変化を経ず一貫した推移をたどる。

口縁部の作りの違いにより壺と同様、端部肥厚形のA・水平拡張形のB・垂下形のCの三種に区分することができる。おおむねA・Bが古くそれぞれオーバーラップしながら垂下形のCに収斂してゆき、基本的に一種とみてよいだろう。

器形変化の方向は、細身の胴部をもつものから寸胴中年太りのタイプのものへ、垂下口縁は垂下の度合いが増していく。

裝飾の変化では、古手のものには長方形透孔をもつものが多く、三角形透孔、円形透孔などへと推移するらしい。その三角形透孔は小形化の方向をたどり、高坏脚部文様の変化同様貫通せず器壁表面の施描文様として痕跡化するものがある。

すべての個体の胴部・脚部は一貫して凹線文で飾られているが、古手のものは凹線文帯ないしは文様帯と間帯の区分が明瞭で、新しいものほど全面を凹線文で埋め尽くす傾向がある。付随する裝飾文様は、壺・高坏など他の器種とほぼ同様な要素の変化をたどっている。

この種の大形化した中期後半に属する器台は東中国山地以外の地域ではあまり例を見ず、あっても高本遺跡のように中期中葉にまで遡る例は少ない。畿内第4様式にも大形器台が散見されるが、起源の問題は別として裝飾性に乏しく一見して別の土器伝統に属すと判断される。所属時期も一般に新しいようである。

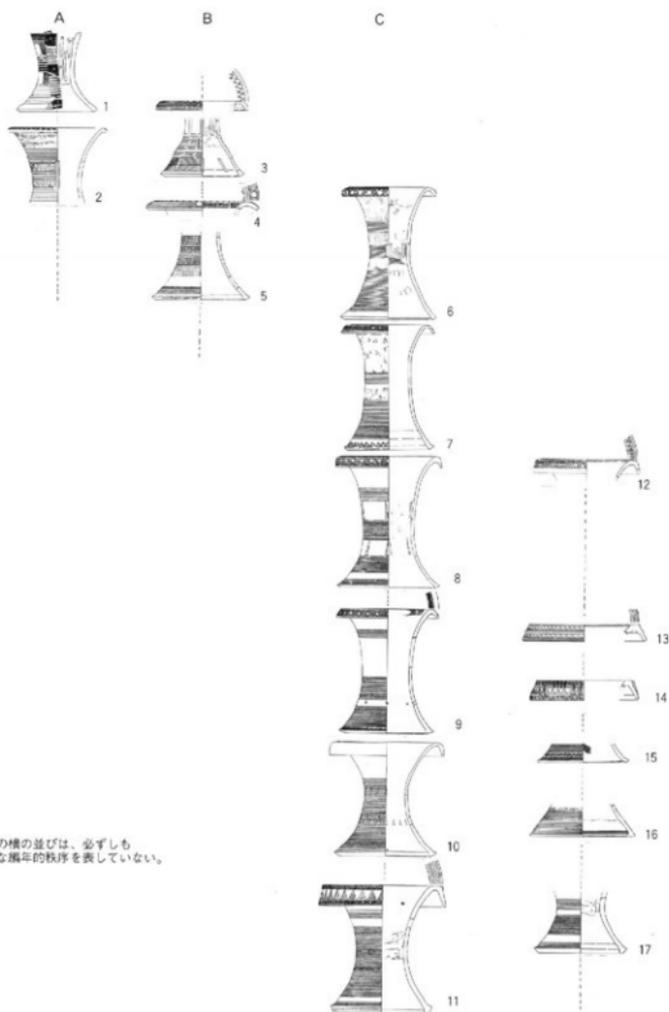
この種の器台は、東は加古川上流域から西は久世・勝山地域や新見方面まで分布するらしく、南では岡山市の雄町遺跡・百間川遺跡で発見されているが、そこでは今のところ当該期の主要な土器構成要素とはなっていない。

裝飾要素の強いこの種の大形器台が東中国山地でいち早く発達したとすれば、後期に墓地遺跡で発見される裝飾要素の強い大形器台と対比し、一考に値するかもしれない。

後期の器台形土器

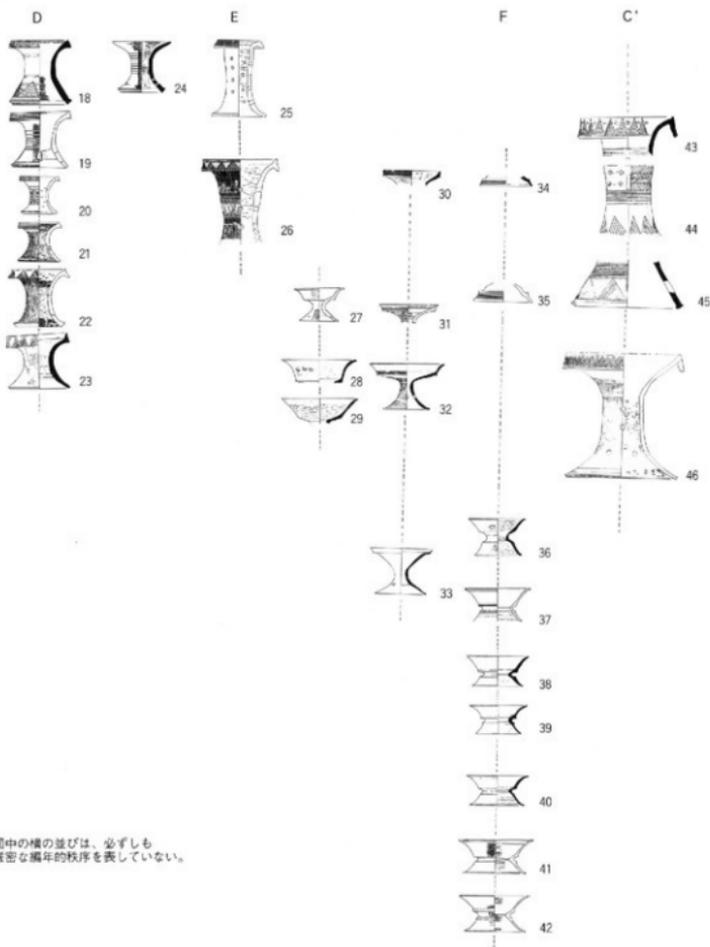
後期の器台の特徴は、集落遺跡で発見されるものと墓地遺跡で発見されるものとの大きな特色の差が出現することにある。

集落遺跡で発見される器台には、上束式及びその在地化した様相をもつもの（D）、播磨・但馬の影響下で成立したとみられる器形のもの（E）、山陰地方の影響下にある器台（F）などがあり、中期の



※図中の横の並びは、必ずしも
厳密な編年の秩序を表していない。

図1 中期の器台形土器系統想定図(縮尺約1/16)



※図中の横の並びは、必ずしも
厳密な編年の秩序を表していない。

土器出土遺跡

高木遺跡 (1)、栗保井遺跡 (2, 6)、湯塚遺跡 (3)、西吉田遺跡 (4, 5, 11, 17)、金作別所遺跡 (7)、一貫西遺跡 (8, 12)、ビシャコ谷遺跡 (9) 野入野遺跡 (10, 13-16)、大田十二件遺跡 (18, 24, 32, 33, 36)、常山遺跡 (19)、大塚遺跡 (20, 25)、東成野遺跡 (21)、稲荷遺跡 (22)、一貫東遺跡 (23)、小塚遺跡 (26)、支待遺跡 (27)、京免遺跡 (28-30, 34, 38-40)、二宮遺跡 (31, 37)、御家遺跡 (35)、法華坊遺跡 (41, 42)、天神原遺跡 (43-45)、オノ新遺跡 (46)

図2 後期の器台形土器系統想定図(縮尺約1/16)

器台が基本的に一種にとどまっていたこととおおいに異なる様相を呈する。また、時間の推移とともに小形化の傾向を増し、後期中葉以降は山陰地方の影響下で成立したとみられる鼓形器台を除いてほとんどみられなくなる。

一方、墓地遺跡では同じ須弥送儀札に使われたとみられる装飾性の強い大形の器台がしばしば発見され、中期の垂下口縁形器台も墓地遺跡でその命脈を保つらしい(46)。

津山市では、在来形の装飾器台衰退期に併せて特殊器台が出現し、下横野上原遺跡、総社下道山遺跡、小原権現山遺跡、皿丸山遺跡、田邑有本遺跡で発見されている。

鼓形器台は、後期後葉以降盛行し古墳時代までその存在がかなりの数みとめられるが、集落・墓地ともに出するという特徴がある。

なお大田十二社遺跡発見の33の器台は若狭地域でみられる器形で、その胎上の特徴などからは但馬方面からの搬入品とみられる。

「東蔵坊遺跡」-B地区-	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集	1981
「高本遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書8	1975
「須東遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書8	1975
「椋山遺跡」		1979
「天神原遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書7	1975
「京免・竹ノ下遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集	1982
「野介代遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書3	1973
「押入西遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書3	1973
「二宮遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書28	1978
「金井別所遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集	1988
「オノ船遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集	1985
「大田十二社遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集	1981
「大畑遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集	1993
「崩塚遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集	1989
「一貫東遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集	1992
「小原B・稻荷遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集	1990
「一貫西遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集	1990
「ビシャコ谷遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集	1984
「西吉田遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集	1985
「小原遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集	1991

吉見林道法面採集の土器

平岡 正宏

1. はじめに

平成9年6月2日、津山弥生の里文化財センターに、津山市吉見地内の林道法面に土器が露出しているとの連絡を受け、文化財センター職員行田裕美と平岡正宏が現地を確認した。

現地は津山市北部、加茂町との境に近い天狗寺山から派生する尾根筋上の標高約330m付近の地点で、眼下には加茂川が北東から南西へ流れている。林道が尾根筋の南側を削っている状態であり、その法面に13個体以上分の土器片が露出していたため、それらを採集した。

その後文化財保護法第57条の6第1項の規定により、遺跡発見の通知を文化庁長官宛てに提出した。所在地地番は津山市吉見1431である。

2. 採集の状況

現地は前述のとおり吉見集落から北の山へ向かう林道であり、道の法面は地山が露出した状態であった。その林道道路面から約2mの高さを床面として幅60cm、高さ60cm程度範囲で土壌状の黒色土の堆積が認められ、この黒色土の中に遺物が露出していた。

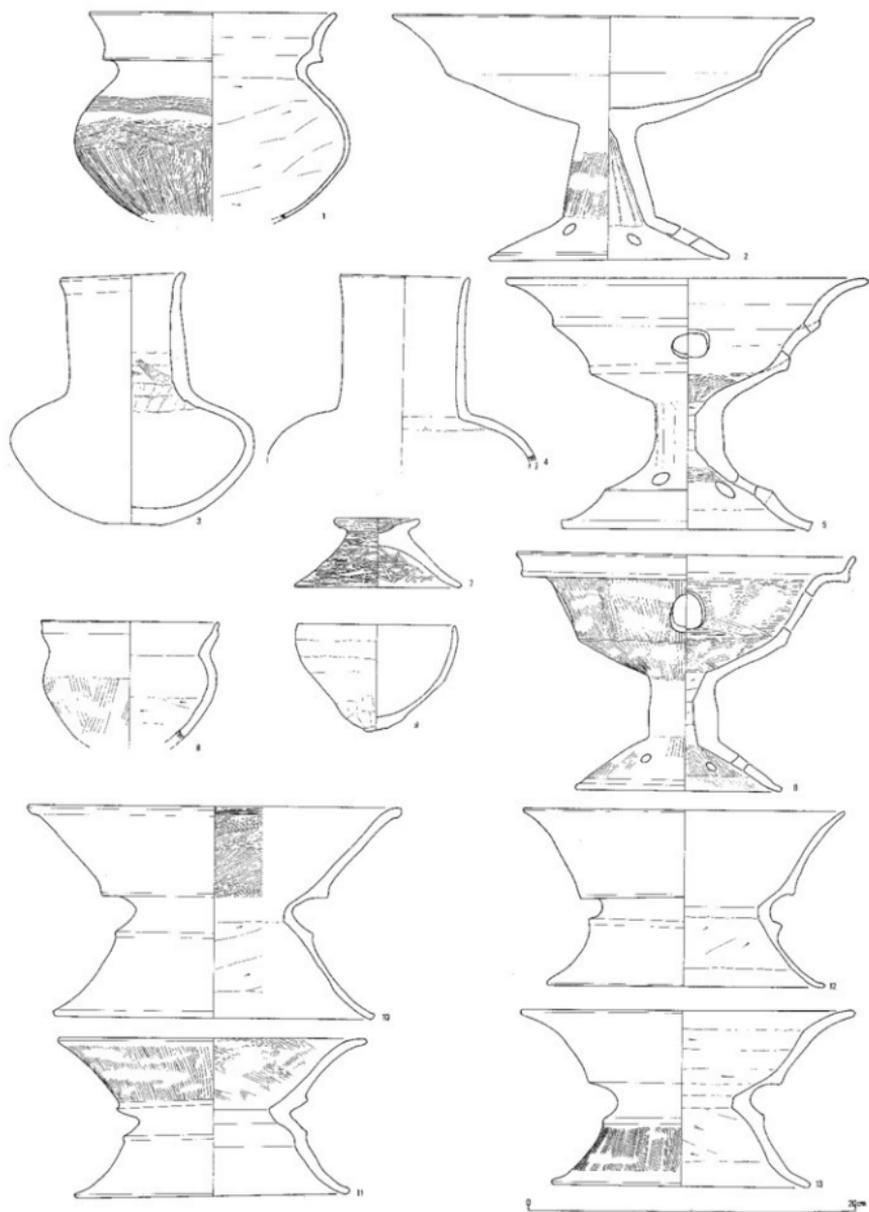
3. 土器の概要

採集した土器は甕・高杯・長頸壺・器台・鼓形器台等である。以下、順次説明する（第2図）。

1は甕形土器である。口径15cm、器高14cm、胴部最大径17cm程度で、二重口縁のものである。調整は口縁部内外面は横方向のナデ仕上げ、胴部外面上半はナデの上に緩やかな波状文、最大径付近は斜め方向のハケ目、下半は垂直方向のハケ目であり、胴部内面はヘラケズリである。口縁部付近の器壁は厚いが、胴部の器壁は2～3mm程度と非常に薄く仕上げられている。底部は接合する破片が少なく定かでは

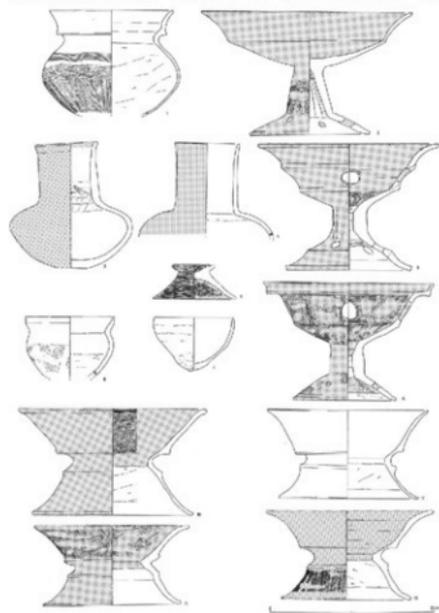


第1図 遺跡位置図



第2图 出土器物实测图

ないが、丸底ないしは僅かに平底状を呈するものと思われる。2は高杯である。器高15cm、杯部径26cm、脚端部径15cm程度のものである。杯部と脚部は接合によって形成されており杯部の口縁部の立ち上がりは外に大きく開く。杯部内外面及び脚部外面には赤色顔料の塗布が認められ、脚部外面には斜め方向のハケ目調整が、脚部下部には四方向の円孔、脚部外面には浅い凹線が施される。3・4は長頸壺である。口径8cm、器高11cm、最大径15~16cm程度のものであり、いずれも頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。体部はいずれも扁平であり3の底部は僅かに平底状を呈する。また4の外面には赤色顔料の塗布が認められる。5・6は高杯か器台か判然としないが、杯部と脚部が貫通しているので一応ここでは「器台」として扱っておく。5は器高16cm、器受部径22cm、脚部径15cm程度のものである。器形は器受部が複合口縁状を呈し、脚部も逆複合口縁状を呈するもので器受部・脚部共に四方向の円孔が存在する。調整は内外面ともにナデ仕上げであるが、筒部内面は刷毛目の後にケズリが認められる。あるいは「高杯」として製作した後に脚部をヘラで穿孔し、「器台」状に仕上げたのであろうか。外面全面及び器受部内面に赤色顔料の塗布が認められる。6は器高15cm、器受部径21cm、脚部径13cm程度のものである。こちらもあたかも「高杯」として成形した後に脚部に穿孔し、「器台」として仕上げたものようである。器受部は筒部から斜め上方へ一度屈曲しながら開き、口縁部付近で緩やかに水平に開く。そして口縁部はそこから垂直に立ち上がり、やや外方に開いて収まる。脚部は2の高杯とはほぼ同様の作りで、四方向の円孔と外面の浅い凹線が施される。こちらも外面全面と器受部外面に赤色顔料の塗布が認められる。7はあるいは低脚杯かと思われるが、1の壺の口縁部に、図示している上下方向であたかも蓋をするような状況で出土しているため、一応ここでは「蓋」として取り扱う。



第3図 赤色顔料塗布範囲

口径10cm、器高4cm程度のものである。内外面ともにヘラミガキが施されるが、内面はやや粗い。全面に赤色顔料が施される。8・9は小型の鉢形土器である。口径10cm、器高7~8cm程度のものである。8は胴部から口縁部が一度屈曲し、外方に開く。胴部外面下半は縦方向のハケ目、胴部内面下半はヘラケズリである。他は横方向のナデ仕上げである。9は回転台は使用していないようであり、底部は僅かに平底状に作り出しており、口縁端部は僅かに内湾している。外面下半には指頭圧痕が認められる。10~13は鉢形器台である。器高10~13cm、器受部径19~23cm、脚部径16~20cmのものである。いずれも口径に比べて器高が低く、筒部の非常に短いものである。個々に説明を加える。10は器高13cm、器受部径23cm、脚部径20cmであり、外面はすべてナデ仕上げであり、器受部内面はハケ

目、脚台部内面はヘラケズリが施される。脚台部内面以外には赤色顔料の塗布が認められる。11は器高10cm、器受部径19cm、脚台部径17cmであり、器受部内外面はハケ目、筒部及び脚台部内外面はナデ仕上げである。11と同様、脚台部内面以外には赤色顔料の塗布が認められる。12は器高11cm、器受部径20cm、脚台部径17cmであり、内外面ともに摩滅が著しく調整は不明であるが、脚台部内面にはわずかにヘラケズリの痕跡が認められる。また、赤色顔料の塗布も不明であるが、他の例から見て同様に脚台部内面以外には赤色顔料が施されていたのではなかろうか。13は器高11cm、器受部径21cm、脚台部16cmであり、器受部外面はナデ仕上げ、内面はヘラケズリ、脚台部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。10・11同様外面全体及び器受部内面に赤色顔料の塗布が認められる。

これらの他に上記のものとは別個体の鼓形器台片若干及び土器細片があるが、図示し得ない。

4. 土器の位置付け

以上、採集した土器について述べてきた。ここで、これらの土器についての位置付けを示しておく。これらの土器については黒色土中に折り重なるような状況で出土しており、この場所に埋められるかあるいは廃棄された時期はすべて同時期と考えて差し支えない。

これらの土器の時期については基本的に弥生時代後期に位置づけられるが、個々の遺物の時期を若干整理しておく。まず1の甕は外面の調整や底部形態から、弥生土器の様式と編年「因幡・伯耆」(註1)のVI-2様式に、同じく「出雲・隠岐」(註2)のV-4様式に、また鍵尾II式、青木V・VI期に相当するものであろう。2の高杯は備前・備中地域に多く見られるもので、杯部と脚部が別作りとなり、筒部と脚部との境が明瞭となり、裾部は大きく屈曲して外方に開くという特徴から、平井編年(註3)のV-2b期に位置づけられ、高橋編年(註4)のⅢ-a期に、弥生土器の様式と編年「備前・備中」(註5)のそれぞれV-3期に相当する。4・5の長頸壺は出雲V-3様式の長頸壺よりもやや後出する様相を示している。7の低脚杯か蓋かまがうものは因幡・伯耆VI-2様式あるいは出雲・隠岐V-3様式に類別が求められる。10-13の鼓形器台はいずれも筒部の短いプロポーションのもので、因幡・伯耆VI-1様式以降、出雲・隠岐V-4様式以降に位置づけられる。

以上よりこの一群の土器は2のように若干時期の異なるものも認められるが、概ね弥生時代後期末に位置付けることができ、この地域の編年では大田十二社5式に並行関係が求められるものと結論づけられる。

また、前項でも述べたが5・6については器形には「高杯」であるが、脚内部が割られて「筒抜け」状態になっていることや杯部分にも四方向に円形の穴が存在していることから用途的には「器台」として用いられたのではないかと考える。5・6のような器形の類例は知らないが、久米町榊山遺跡群の荒神遺跡12号住居址出土の高杯に、杯部と脚部の接合部が閉塞されておらず器台としての機能を持つものかと推定されるものが存在している(註6)。

なお、ここで出土状況について若干補足しておくならば、鼓形器台12の上に甕1が乗り、その上に蓋(?)7が被せられている状況が確認できている(模式図)。同様に鼓形器台の上に壺形土器が乗っている状況は島根県西谷3号墓の第1主体の供献土器群などでも認められている(註7)。このような状況で遺物が出土しているこの遺構の性格については次に述べることにする。



第4図 出土状態模式図

5. 遺構について

林道法面で観察された遺物の包含層は断面方形を呈しており、周囲が地山であることを考えるとこれは明らかに人工的に掘り窪められたものと判断でき、その規模・形状から土壌の断面が露出しているものと推定される。さらに前項で述べたとおり遺物の中には「供献」されたと思われる状態で出土しているものもあり、この遺構は土塚墓であると考えられる。

なお、現地での観察では、この遺構からやや尾根筋を上った部分で溝状の掘り込みらしきものが認められる。推定の域を出ないが、あるいは墓域を区画した土壌墓群が存在しているのかもしれない。

6. まとめ

以上のように吉見地内で採集した土器については、おおむね弥生時代後期末に位置づけることができ、さらにそれは土塚墓に伴うものと推定され、周辺に土塚墓群が存在する可能性があることを再度確認してまとめとしておく。

今回報告したものはあくまでも採集資料であるため土器の資料紹介とし、これ以上は今後の調査を待ちたい。

註1 正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社1992年

註2 正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社1992年

註3 平井典子「備前・備中」『YAY!』弥生土器を語る会1996

註4 高橋謙「弥生土器-山陽-」『考古学ジャーナル』ニューサイエンス社1980年

註5 正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社1992年

註6 村上幸雄他「榑山遺跡群」久米開発事業に伴う文化財調査委員会1979年

註7 渡辺貞幸他「西谷墳墓群の調査（I）」1992年